

時事英語教授法

— 複合的アプローチによるメディア英語の習得 —

小林 敏彦

ABSTRACT

本稿では、大学の教養英語の授業における時事英語の教授法について論じ、さらに具体的な授業のためのデータ収集、タスク、シラバスの作成、授業の展開、フィードバックについて紹介する。従来のようなリスニングとリーディングに限定された授業展開や指導ではなく、プレゼンテーション、ロールプレイ、ディスカッションを取り入れたスピーキングおよび翻訳と投書を中心とするライティング指導を含めた、4技能の習得のための複合的なアプローチを論じる。また、学習者の学習を授業中心から自立的学習へ移行できるよう、教師の指導に代わるフィードバックの確保についても触れる。

1. INTRODUCTION

EFL 環境下では、教室外の SLA 促進要素として、インプット、アウトプット、インターアクションのいずれも学習者の自発的なアクセスが不可欠となる。このことは、とくに発信技能に関して顕著である。学習者と教師の接触及びクラス時間が限られているという問題を克服するには、自立的な学習 (independent learning) を奨励し、促進しなければならない。

言語の使用よりも知識に重点を置いた教授法で日本の大学生に英語教育を施しても、社会が期待する英語の運用力を有した人材を育成することは困難である。今日、NEC や日産をはじめ、巨額の予算を投じて社内英語教育を施す企業が増えてきているが、それを前提に大学側が英語の運用面を強化する責任を放棄するなら、それは — 「会話は巷の英会話学校で」と開き直り、高校のオーラルコミュニケーションという正規の科目を文法などに読み替え

る姿勢と同様——公教育の責任を放棄するに等しいであろう。

外国語教育は、その目的と意義、そしてそれを達成させるための具体的手法を学習者に常日頃から明示し自覚させ、効率的で理論的な教育環境を創造し維持してこそ達成可能であり、教師には、目的達成のために最適な英語教授法を研究し開発し、実践することが期待される。しかし、いくら理想的な授業を展開することができても、リスニングやリーディングのような受信技能についてある程度の効果を望むことができるのだとしても、アウトプットについては、現行の一般的な大学の英語教育のカリキュラムで、その源泉となる十分なインプット量を授業中に提供することは到底不可能である。

外国語学習の理想は、学習者が独力で、または同レベルの複数の学習者が集まった場面で、独習できるようにさせる点にある。教師の重要な役割のひとつは、教室外での学習法を紹介し、最終的に学習者をひとり立ちさせることである。また、教師が不在の場合に独習可能になる代替フィードバックをいかに確保すべきかを、学生に明示することが不可欠である。

学習者に独習する力を身につけさせるには、時間の経緯とともに教師の関与 (teacher's control) をなるべく少なくしていくことが大切であるが、その際、フィードバック、特にスピーキングとライティングのような発信技能のアウトプットに対するフィードバックをどう与えるかが最大の難点となる。スピーキングには、話し相手が介在し、ライティングには読み手が介在する。ともに評価や修正がなければ上達 (特に accuracy) は困難である。

authentic material (実物素材)

大学の授業でオーセンティックな教材を使用する機会が増えてきている。オーセンティックであるということ、すなわち “authenticity” は以下のように定義されている。OED の第 2 版では “being real, actual” (Vol. 1, 1989: 797), Webster's New World Dictionary of American English 第三版の College Edition では “reliability and trustworthiness, stressing that the thing considered is in agreement with fact or actuality” (1988: 92) と定義

されている。外国語教育での定義としては、Richards と Platt & Platt が示す“the degree to which language teaching materials have the qualities of natural speech or writing”(1992: 27)がある。オーセンティックな教材となると、Porter & Robers (1981: 37)が示すように “not initiated for the purpose of teaching”である。

オーセンティックな教材へとシフトが進むのは、時事英語に対する関心が高まり、実物素材が入手しやすくなったためだと考えられる。時事英語への関心が高まった背景には、ビジネス界からの大学英語教育への批判と実用英語への期待がある。ビジネスの現場は、つねに今日的な話題と直面しており、新聞やニュースなどのメディアを通じた情報収集がルーティーンになっている。世界の情報の圧倒的量が英語であることから早い時期に時事英語に触れさせることの重要性が教師と学習者の双方の間で徐々に認識されてきた。Yamane & Yamane(1996)は、時代の要請について以下のように述べている。

最近では文字からの情報ばかりではなく、テレビを通して同時に視覚と聴覚に訴える情報が多くなってきている。そのような時代において英語学習面でも「時代のマスメディア」に対応できる準備をしておく必要があるのではないだろうか。(p. 1)

同様に、Yasuda & Fukuda(1997)は、この傾向を以下のように評価している。

近年ほとんどの大学や専門学校で、いわゆる時事英語が学ばれるようになったことは、国際化を必然としている現在の日本にとって、誠に喜ばしいことである。(p. 1)

さらに、時事英語を授業に取り入れ実践している Marshall & Miyabe (1995)は、それが学習者と教師の双方に恩恵をもたらすとして、以下のように強調している。

Using authentic data from the mass media is a very stimulating source of input for the language classroom. Using these to design

suitable tasks for students is a challenging but rewarding way to access current English, for both students and teachers. (p.143)

たしかに、これは恩恵深い時事英語学習であるが、やはり学習者からは教材としての難しさが指摘されている。吉田他(1996)による大学生377人を対象とした調査では、英字新聞は難しいものと考えられている傾向があり、語彙が難解であることや大学生の背景知識が不足していることが判明している。特に政治経済関係の記事においてその傾向が著しかったという。

オーセンティックな教材の使用に対する懸念について、Larsen-Freeman(1986)は、扱う分野を制限するよう以下のように提唱している。

For students with lower proficiency in the target language, it may not be possible to use authentic language materials. Simpler authentic materials (for example, the use of a weather forecast when working on predictions), or at least ones that are realistic, are most desirable. It is not so important that the materials be genuine as it is that they be used authentically. (p.136)

天気の話など、日常的な現象や知識に関しては問題ないだろうが、大学生の知的レベルを考えると、気象だけではなく、自然科学、人文社会といった分野の枠を超えて、様々な分野の素材に触れさせ学習させることが重要ではなかろうか。

非文学系テキストの人気

学習者側の問題に留まらず、教える側の知識の限界や扱う内容の好みが授業の内容に大きな制限と方向性を与えていることは否定できない。大学英語教官・教員の大多数が文学部出身であるために、素材は文学作品が中心となり、投資信託や国連海洋条約などを扱うことはまれである。そのため、伝統的に経済学部も医学部も大学1、2年の授業では専門分野のひとつである文学の講義と類似した授業を受けてきた。この点について Kizuka(1996)は以下の見解を示している。

大学に入学して初めて時事英語のコースを取り、英字新聞を読む学生はほとんど例外なく新聞英語は難しいと言います。これは決して彼らの英語力が足りないからではなく、これまでの日本の英語教育が文学作品に片寄っていたため英字新聞独自の表現や専門用語に接してこなかったからです。(p.1)

しかし、ここ数十年に様子は激変した。今日では文学作品のテキストが息を潜め、代わりに評論文、新聞や雑誌記事、さらに演習問題付きの語学教材の占める割合が大幅に増えている。一例として、表1にある小樽商科大学のシラバスから抜粋した使用テキスト名とジャンルの一覧表を見ると、英語I、II、IIIで使用されていた全テキストに占める文学作品のテキストの数は、1984年は全テキスト38冊中22冊で57.9パーセントだったのが、2001年では31冊中4冊で12.9パーセントに激減している。こうしたシフトの背景には、大学生の学力低下により深い読みが要求される文学作品が読めなくなった事情も考えられるが、時事英語の方が文学作品よりも、学習者にとって平易で理解しやすいとは言いがたいであろう。上述したように多くの大学生が時事英語の語彙と内容は難解であると考えているのだ。

時事英語の定義

「時事英語」は一般に“current English”と訳されるが、本来この英語は現代において使用されている英語全般を指す言葉であり、この訳語では漠然過ぎる。日本語の「時事英語」はもっと狭義で、「新聞、雑誌、ラジオ、テレビ等のいわゆるジャーナリズムで使用されている英語を意味する」(小川編、1982:136)と受け止められている。ゆえに、“English in (mass) media”または“(mass) media English”と訳するのが妥当であると筆者は考える。

メディアの英語は、非常に実用価値が高いデータであり、また最近では比較的入手しやすい素材である。ここでいうメディアとは、テレビでラジオ放送、新聞、雑誌、WWWを指す。いまや衛星放送の発達で外国のニュースが茶の間で自由に聞ける時代である。米国の大統領の演説や新聞記事もイン

TABLE 1 小樽商科大学英語クラスで1984年度と2001年度に使用されたテキストの一覧(外国人教師を除く)

	1984年度	2001年度
英語 I	[文] Hemingway: The Killers & Other Stories	[語] コミュニケーションのための英文法ワークブック
	[文] Hemingway: The Old Man and the Sea	[語] コミュニケーションのための大学英語入門
	[文] Bates: The Daffodil Sky and Other Stories	[評] The Cultural Network
	[文] Lawrence: The Shadow in the Rose Garden	[語] The Sound of Music
	[文] The Portobello Road & Other Stories	[時] Listen to the Voices of the World
	[文] Muriel Spark: Voices at Play	[時] Newspaper English 20001 Edition
	[評] The Distinctiveness of the Japanese	[文] Voices at Play
	[評] The People of Japan	[語] English Step by Step
	[評] Confessions of a Japanologist	[評] Language and Culture
	[評] Japan as I Saw Her	[時] ニュース英語パワーボキャブル4000語
英語 II	[評] Britain Known and Unknown	[語] Idioms for Everyone
	[評] America as a Civilization	[時] Newspaper English
	[評] British Short Stories of Today	[語] The Expanding Universe of English
	[評] American Communication Patterns	
	[文] The Heart is a Lonely Hunter	[評] American Myth, American Reality
	[文] Colonel Julian and Other Stories	[文] Dubliners
	[文] Death in Spring	[語] English Master Box (1)―TOEIC
	[文] A Streetcar Named Desire	[評] American Studies Seminar
	[文] Uncle	[評] Monet, Manet, and Degas Living in Modern Times
	[文] The Fiddler of the Reels and Other Stories	[語] 基礎英文講義法
[文] Modern American Short Stories	[評] 日本とアメリカ: 深層文化へのアプローチ	
[時] <u>Ann Lander's Advice in the Asahi Evening News</u>	[語] ネイティブがよく使う [英単語・イディオム・決まり文句]	
[文] The Long Valley	[評] What is linguistics?	
[文] The Child Who Never Grew	[語] The Expanding Universe of English	
[時] <u>No Noise Isn't Good Noise</u>	[評] The Robot as Enemy? and Other Science Essays	
[評] The Invisible Ground	[評] The World History of the Twentieth Century	
[評] Problems of the World Today	[文] To Please His Wife and Other Stories	
英語 III		[語] Hot Beat Listening: Understanding Rock and Pop
		[評] Exploring Hidden Culture
		[文] The Shadow in the Rose Garden
		[評] Man and Culture
	[文] Nineteen Eighty-Four	[語] 英単語出題ランキング
	[文] England, My England	
	[文] After the Show and Other Stories	
	[文] A Bit off the Map and Other Stories	
	[文] The Third Man	
	[文] Best Stories of William Saroyan	
[文] Bitter Sweet Love Stories		
[語] All About Language		
[語] Language in Thought and Action		
[評] The Fire Next Time		
[評] Social Anthropology		

注意: [文] ……文学作品 [評] ……評論、伝記、学術等 [語] ……語学 [時] ……時事英語

ターネットで無料で入手可能できるし、さらに音声付きファイルもあり、いつでも好きなニュースを選んで聞くことが可能だ。このように、メディアを活用できる理想的な学習環境は整っているが、積極的に活用しようとする者がそれほど多いとは言えない。個人が自由に教材となり得るデータを入手できる環境が整備されているということは、教室外での自主的な学習と習得を促進させることが可能であるということであり、教える側はこの事実をしっかりと把握しておかなければならない。

教師は、自ら最新のネット技術に親しみ、常日頃から学習に活用可能なものを探し、何らかのヒントを得て授業および学習者の言語習得のことを思いやるべきである。インターネットを始めとする通信技術の発達によりよりオーセンティックな教材を即時入手できるため、メディアの素材は鮮度が大切であるにもかかわらず、市販のテキストとして販売される頃には時間のずれが生じてしまう。このため、教師は毎日のように変わる国際情勢に合わせて教材を作成しなければならないことがある。

発信技能を含めた時事英語教育

時事英語教育は、市販テキストの構成からも分かるように、従来リスニングかリーディングを中心としたものであったが、この傾向について著者を含め異義を唱える者も多い。小野田(2000)は、アウトプットの重要性を以下のように強い調子で主張している。

本来メディアというものは、そこから情報を得て、その情報を何らかの形で利用し、話題に関して何らかの feedback をしたり、自分の考えを構築する材料とすべきであるし、英語学習の目的は、input を output につなげ、自己表現力を養成することである。(p.87)

発信技能を強調するからといって、単純に、受信技能を軽視することにはならない。Fujii & Kato (1997)は、時事英語を学ぶ行為を、「時事英語を理解すること」と「時事的な事柄や問題に関して英語でコミュニケーションを行うこと」の2つであるとし、学習の順序について以下のように述べている。

学習の順序としては、いうまでもなく、「理解」から入っていかねばなりません。英字新聞を読めず、英語放送を聞いてもさっぱりわからない人が満足な英語を書けるはずがありませんし、話すことも期待できません。(p.1)

これは、コミュニケーションと聞けば何よりもまずスピーキングを連想するような英語習得を安易に考える学習者に対する痛烈な警告である。相手の言うことが聞き取れなければ相互コミュニケーションは成立しない。インターネットの時代には、電子メール文書を画面上で理解し即座英文で返信することが求められる。音声だけではなく、書き言葉のコミュニケーションもますます重要になってきている。強固な受信能力の裏付けがなければ、まともなアウトプットやインターアクションは期待できない。リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの4技能は、すべて等しく時間をかけて学習することが大切である。

受信技能と発信技能のバランスに関して、Shiokawa(1997)は、リスニングとリーディングに偏重した従来の時事英語教材に疑問を抱き、“critical reading”から“critical writing”(p.76)へ発展させる統合的な教授法を開発し実践している。この教授法は、工夫しだいでは、少々レベルが高くなるが、“critical listening”と“critical speaking”が統合可能であることを示唆しており、簡易化された初期的タスクとしては、ニュースを聞いて英問英答させるタスクなどが考えられる。

時事英語と内容スキーマ

時事英語の存在意義は情報の伝達にあり、文学とは読む目的や読み方に質的な差異がある。Briton, Snow & Wesche(1989)は、情報収集という目的意識を持たせて言語学習を進めることの重要性を、以下のように述べている。

Successful language learning occurs when students are presented with target language material in a meaningful, contextualized form with the primary focus on acquiring information. (p.17)

このように、時事英語を教えるにあたって、受信技能では、5W1Hの把握、すなわち正確に早く情報収集する力が、発信技能では、一定の情報に対する評価を正確に効率よく表現できる力を養成する教育を施すことが重要である。伝統的に、時事英語の授業はリスニングとリーディングに限定されてきた背景があるため、前者の受信技能については比較的实践しやすいかも知れないが、後者の発信技能については、素材で提示された情報以上の内容スキーマ(content schema)が構築されていなければならない。そのため、内容中心の授業(content-based teaching)を施す必要があり、教える側に広い分野にわたる知識と関心が求められる。前出の吉田他(1996)も、スキーマの活性化を視野に入れた授業を組み立てる必要性を説いている。

船山(1996)は、具体的な時事英語素材を前にしたとき必要となるのは、「語学的知識を超えた広い背景知識に根ざした文脈の理解」(p.15)であるとし、事前に時事的な背景知識を確保した上で英語理解を促進していくところに、時事英語教授法の特徴を見出している。Miyano & Ruelius(1999)は、背景知識の重要性を以下のように説いている。

英語をマスターしようと言う野心を持っている学生にとっては、英語の勉強と並行して、日米の政治・経済・文化・社会などの言語の背景をなす諸要素を比較検討し、更に文化的相違点・類似点などを総合的に研究することが不可欠だと思う。そして、このような語学プラス α の学習法ほど、気の利いた英語学習はあるまい。(p.3)

語彙解説を超えたさらなる時事的事象に関する内容スキーマを構築するには、学習者が普段から自発的に新聞やニュースに積極的に接し知識を広げていることが大切であるが、現実には不十分な知識しかもちあわせていない学習者がほとんどであるので、授業ではプレ・リスニングやプレ・リーディングの段階で工夫が必要となる。

時事英語と構文・文法

時事英語を活用した英語学習について、語彙と内容が難解であるという懸念が学習者の間にあることは既に指摘したが、構文についてはそれほど懸念する必要はない。時事英語で用いられる文法項目については、小林(1997)の実証研究がある。同研究は、世界の27か国で発行されている57紙・誌の英字新聞、雑誌とCNN、BBC、ABC、Inside Edition、NHK Japan Weeklyのニュース番組で使用されている英語の構文を調べ分類した結果、表2にあるように、1)不定詞、2)完了形、3)分詞の形容詞的用法、4)関係詞、5)分詞構文、6)比較級、7)倒置、8)第5文型、9)動名詞、10)間接疑問文の順で使用頻度が高く、日本の中学校で習う項目が88.7パーセント、高校で習うものが11.3パーセントであることが判明した。この事実を学習者に熟知させれば時事英語に対する不必要な違和感を少しでも緩和できることであろう。

2. TEACHING AND LEARNING MEDIA ENGLISH

筆者は、片寄りのない中立的な基本語彙を身につけてきている大学生に、より現実の世界で使われている特定分野に固有の語彙を習得する必要性を説き、既習語彙の性質をより多様化する手段として、時事英語、特にニュース英語を授業で使用してきた。CNN、ABC、BBCなどの放送を早朝に録画し、時事英語の名の下に新鮮なうちにその日の授業で使用、さらにニュースの背景を詳細に解説した“content-based”(内容中心)の授業を数年続けてきた。

リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの技能は、実用英語ではどれも疎かにできない。「実用イコール英会話」という考えは、従来の教養対実用という硬直した二分法の産物である。インターネットの時代になり、リーディングとライティングという書き言葉の重要性が見直されている。話し言葉と書き言葉、受信技能と発信技能のいずれにこだわることもなく複合的に学習し、4技能をバランスよく習得することが望ましい。

TABLE 2 時事英語で 사용되는文法項目

English Stream 創刊第2号

ニュース英語で用いられる文法項目 使用頻度と履修期				
履修する学校 頻度別文法項目	例文数	頻度	中学	高校
1) 不定詞	34	18.9%		
名詞的用法	20	11.1%	●	
形容詞的用法	5	2.8%	●	
副詞的用法 (目的)	5	2.8%	●	
副詞的用法 (結果)	4	2.2%		●
2) 完了形	20	11.1%		
現在完了・結果	7	3.9%	●	
継続	8	4.4%	●	
経験	2	1.1%	●	
現在完了進行形	2	1.1%		●
過去完了	1	0.6%		●
3) 分詞の形容詞的用法	14	7.8%		
現在分詞	4	2.2%	●	
過去分詞	10	5.6%	●	
4) 関係詞	13	7.2%		
who	2	1.1%	●	
that (主格)	4	2.2%	●	
which (制限用法)	1	0.6%	●	
which (非制限用法)	1	0.6%		●
前置詞 + which	1	0.6%		●
目的格省略形	1	0.6%	●	
where (制限用法)	1	0.6%		●
where (非制限用法)	1	0.6%		●
as	1	0.6%		●
5) 分詞構文	8	4.4%		●
6) 比較級	5	2.8%		
原級	1	0.6%	●	
比較級	2	1.1%	●	
最上級	2	1.1%	●	
7) 倒置	2	1.1%		●
8) 第5文型	2	1.1%		●
9) 動名詞	1	0.6%	●	
10) 間接疑問文	1	0.6%	●	
11) その他	80	44.4%	●	
合計	180	100%	88.7%	11.3%

本稿では、時事英語を素材として各技能を習得させるため、以下にあげる具体的な技能の養成を目標とするよう提案する。

- 1) リスニング 英語の情報を聞いて5W1Hを把握し、音声認識能力を高める
- 2) スピーキング 報道内容を伝達し、さらに自分の意見を表明し議論できるようにする
- 3) リーディング 記事や原稿を読んで5W1Hを把握できるようにし、語彙力を高める
- 4) ライティング 時事問題に関して作文したり英字新聞に投書できるようにする

これらの達成に少しでも近づけるように、著者が実践している時事英語教授法を、技能別にさらに基本となる4つの要素、データ収集、タスク、学習の頻度、フィードバックに分けて整理していきたい。

データ収集 (data collection) は、教材として使用するために必要な生の素材を集めることである。もちろん、生の状態に近い市販の教材を購入したり借りて使用することもできる。

タスクは、入手したデータをどう活用して各技能の習得を促進させるかという手法である。各タスクの詳しい実施方法について解説する。

学習の頻度 (frequency) は、学習量と学習が反復される間隔のことを指す。どの技能も、適切なタスクを用いて時間をかければかけるほど効果が期待できると考えられるが、教室での授業だけでなく、それを日常生活の中にうまく組み込む工夫が必要となる。これは、データ収集の困難が影響しやすいし、タスクの内容によって疲労度も違うので、調整が大切である。

フィードバック (feedback) とは、『ロングマン応用言語学用語辞典』(1985)によると、広義には「行動の結果についての報告を提供する情報」(p.133)であるが、教授法としては、Richards と Platt & Platt が “comments or information learners receive on the success of a learning task, either from the teacher or from other learners” (1992: 137) と定義している。これは、

タスクがうまく進行しているか、またある一定の期間にどれくらいの成果が出たのかを知る手段である。これを怠ると、効果のない方法を継続するだけで徒労に終わってしまう。フィードバックは、スピーキングやライティングの技能向上には特に不可欠となる学習のプロセスである。

2-1 : LISTENING

メディアを使用したリスニング活動は、テレビ・ラジオのニュースを聞いて理解する力の養成に役立つ。メディアの英語は、英語を母語話者に向かって発せられる通常の放送と一定の時間帯に英語を母語としない人たちに向かって発せられる、1500語という語彙制限の中で、センテンスも短く、通常より30%減速しクリアに朗読されるVOA(Voice of America) Special Englishなどの特別番組の2種類がある。

通常の生の英語は、実用英語技能検定試験準1級程度の実力者には、適切なレベルではあるが、大学の1年生には語彙、聞き取り、さらに内容においても理解困難である。しかし、学習者用に作成された英文を朗読したような人工的な言語資料(linguistic data)ではなく、本物の英語を提供するには、市販のリスニング教材よりも、実際に放送された生の英語であり、同時に語彙的、統語的、音声的に調整された英語であるVOA Special Englishの番組のニュースを使用した方が効果的である。これほどニュース英語を初めて聞く学習に適した理想的な教材は他にない、と筆者は確信している。

2-1-1 : Data Collection

メディアからのデータは、テレビ、ラジオなどのニュース番組から収集するのが中心となる。テレビであれば、CNN、ABC、BBCなどが見られるBS放送が一般的であるが、ほとんどが海外のニュースなので、国内ニュースを題材にする場合は、ニュースの2か国語放送が利用できる。ラジオでは、イギリス英語ならBBC、アメリカ英語ならVOAが代表的だが、短波ラジオから収録したり、有線放送や衛星マルチチャンネルのサービスを利用すること

ができる。特に、衛星を利用した収録は、音が明瞭で24時間いつでも収録できるので便利である。

音声の収録と同時に重要となるのは、原稿の入手である。多くの放送局はウェブサイトニュース原稿を公開している。VOAの場合なら、実際の放送とは若干違うものの、ほぼ完全な原稿が入手できる。原稿のないニュースを使用する場合は、教師が聞いて書き取るより方法はないが、英語母語話者の協力を得ることが必要となる。

筆者は経験から言えば、1週間前に用意したビデオや新聞の切り抜きが、翌週には劇的な変化のためもう使えなくなる、ということがある。そのため、早朝に収録することが多い。このような場合は、教材と加工したり十分準備することは実質的に困難であるため、タスクはあとで紹介する特定情報の認識タスクや大意の汲み取りなどに限定されるが、新鮮さを提示することは重要である。

2-1-2 : Task

リスニング活動は、大きく分けて2つの要素からなる。ひとつは、内容理解(comprehension)であり5W1Hを把握すること。もうひとつは、音声認識(perception)で個々の音を聞き取ることである。リスニング活動するには、それぞれの目的に応じたタスクを作成しなければならない。本稿でいうタスク(task)とは、学習した項目を強化、習得するために用いられる作業演習を意味し、内容理解のタスクには、質疑応答(Q&A)、多義選択(Multiple Choice)、内容真偽(True or False)などがある。これらを評価のために行えばテスト(test)となり、同じことを学習の強化や習得のために行えばタスクと呼び名が代わるだけで、活動(activity)自体は同じである。多くの教材がテストとタスクを混同しており、実力をつけるための自主教材が力試しのテストのようにになっているものが少なくない。本稿では、以下の5大原則に基づいて作成したタスクを紹介する。これは、Richards(1987)が体系化したリスニング理論に筆者が加筆したものである。

原則1：“Content validity”（内容の妥当性）

リスニング力は、提示されるニュースから得られる情報を汲み取る技能であり、よく聞かなくても背景知識などあれば歴然としているものや、逆に背景知識がなければ答えられないようなタスクではいけない。

原則2：“Listening comprehension or memory”（聴解力か記憶力か）

リスニング力は瞬時に情報を汲み取る力であり、情報を長く記憶し続けることに重点が置かれてはならない。そのため、あらかじめ質問項目を提示することで学習者の記憶負担を軽減する“complete while listening task”（実際の英文を聞きながら完成させる作業）を重視し、またステップ方式を取ることによって毎度聞き取りの焦点が定められるようにすべきである。

原則3：“Purposefulness and transferability”（目的と移転性）

タスクの手順や内容は、現実の英語使用の場で必要な技能を養成するものでなければならない。ニュースを聞く目的は、主に5W1Hの情報を収集することであり、ニュースの要点から細部に関する情報まで汲み取る力を養成するものでなければならない。

原則4：“Testing or teaching”（試験か指導か）

タスクは、あくまでも英語力の習得(acquisition)を目的とするものであり、試験ではないため、タスクの出来具合に学習者が一喜一憂するのではなくあくまでもタスクを完成させるプロセスで実力がつけられるものでなければならない。また、そのプロセスが、現実の英語使用のときに再現できるように手助けしてくれるものでなければならない。そのため、CDを聞く前に、ニュースの内容に関して学習者の内容スキーマを喚起し聞き取りやすくするよう、最重要語彙項目とその意味の提示を行う必要がある。これにより、学習者は紹介されている語句から大まかなニュースの内容を想像することができ、関連知識を頭に浮かべながら聞き取る姿勢が生まれる。

原則5：“Authenticity”（実物に近いか）

聞き取りに使用される題材は、自然の言語に近いものでなければならない。学習者用に吹き込まれたテープばかり聞いていたのでは、実際のテレビ、ラジオ、室内アナウンス、大学の講義、講演会などの生の英語を聞き取れるようにはなれない。調整された教材ばかり聞いているのは、温室で育てられた植物と同様、たくましさに欠ける。

この5原則に基づいて、初級レベル用と中・上級向けの2種類のフォーマットで作成し、筆者が日々使用しているハンドアウトの見本が、図1と図2である。これは、筆者が使用している統一フォーマットであり、あらゆるニュースやその他のデータを使用するときに常用しているものである。全体を Pre-listening activities（準備）、Listening activities（本番）、Post-listening activities（確認）の3段階にし、それぞれのタスクをレベルに応じて若干変えることもある。以下、初級用のフォーマットについて解説する。

Pre-listening activities（準備）

STEP 1. Listening Warm-up（事前情報の提示）

本文の理解を助けるために、ニュースで使用されている最重要語句7つを左側に並べ、それぞれのニュースの中で使用されている意味の日本語を書く。この語句紹介には、前述した内容スキーマを喚起する役目もあるので、ユニットのタイトルとともにこれから聞き取るニュースの内容を推測して、関連した背景知識をなるべく多く思い出すように学習者に指示する。しかし、前にも触れたように時事英語の素材は、語彙解説だけでは不十分なほど背景知識を要するものもある。筆者は、時間の許すかぎり、ラジオから収録した素材であっても、テレビの衛星放送の関連したニュースをビデオに収録して授業で見せたり、世界地図のウェブサイト (www.lib.utexas.edu/maps/index.html) にアクセスし、対象地域の地図を大型スクリーンに映し出し地勢的な解説をしている。これだけでも、限定的だが内容スキーマが喚起され、これから聞く内容を視覚化できるので、話を追いやすくなるものと考えられる。

Listening activities (本番)

STEP 2. Listening for Comprehension (5 W 1 Hの把握)

Task 1 : テープを聞いて、まず次の質問に英語または日本語で答えてください。

ニュースのあらすじに関する質問を与える。英語でも日本語でも構わない。また、紙に書かせる必要はなく、だいたいの内容を口頭で答えさせる。レベルに応じて、2、3度繰り返してから次のステップに進んでもよい。

Task 2 : もう一度聞いて、次の文が本文の内容に合っていればT、合っていないければFを選んでください。

2つ英文が与えられており、それぞれの英文の内容が本文の内容と一致するものをT、一致しないものにはFを選ばせる。5 W 1 Hに関する部分のどこかを、少しまたは大幅に変える。また、肯定、否定などの違いにも注目させる。

Task 3 : もう一度聞いて、以下の質問の答えとして最も適当なものを記号を選んでください。

これは、英文の設問の答えとしてもっとも適切なものを4つの選択肢の中からひとつ選ぶ形式で、TOEIC (Test of English for International Communication) や TOEFL (Test of English as a Foreign Language) で定番の形式である。実物の TOEFL か TOEIC の問題をいくつか紹介し、比較させることも考えられる。

STEP 3. Listening for Perception (音声認識)

最後にテープを聞いて、空欄の中に聞き取った語句を入れてください。

文章全体の中にある7箇所の空欄に、聞き取った語句を書き入れさせる。LL教室などでは、教師のマスターテープを座席備え付けのテープにダビングし、一定の時間内(3~5分)に自由に再生と巻き戻しをさせると、個人化され効率がよい。ここでは、STEP 1で紹介された最重要語句は対象にせず、数字や紛らわしい語句などを選ぶ。また、前までのユニットで重要語句として紹介済の項目を復習できるように工夫する。上級向けのフォーマットでは、冠詞など音節が少なく聞き取り難い要素を含んだ語句を聞き取らせるとよい。

Post-listening activities (確認作業)

[1] TRANSCRIPT (ニュース原稿)

正確に聞き取ったかどうかを確認するために、英文ニュースの全文を各ユニットに載せる。聞き取り後に、全文の視覚的確認は欠かせない。

[2] VOCABULARY REVIEW (語彙解説)

リスニングの際、ただ単にたくさん聞いて“perception”(音声認識)を鍛えるだけでは正確な“comprehension”(内容理解)ができるようにならない。聞きとれても、語彙項目が意味不明であっては、内容を理解することができない。語彙増強も同時に計画的に進めて行くことが不可欠であることを、学習者に強調しなければならない。ニュースの中で使用されている重要語句および発音、和訳、英文定義、関連語句、さらに必要に応じて事典的な説明を加えて解説する。発音については、アナウンサーの発話に忠実な発音記号を載せ、他の発音の仕方がある場合などは並記する。

英文定義は、Webster's New World Dictionary、Random House College Dictionary、Longman Dictionary of American English、Longman Active Study Dictionary of English、Longman Dictionary of Contemporary English、Oxford Advanced Learner's Dictionaryなどが便利である。英文定義で覚えておくと文脈に応じてさまざまな和訳が可能になる。特に、動詞と形容詞についてはしっかりと英文で原義を覚えさせるようにしたい。関連語句は、派生語として他の品詞形、同義語、反意語、さらに日本語の意味を見て当然連想すると思われる語句の紹介も行う。

[3] TRANSLATION (全文訳)

ハンドアウトには、正確に英文を理解しているかどうかを確認するために全文訳も載せるが、教師の判断で省いても構わない。これは、あとで英作文に利用することも可能で、ニュース原稿の英文と突き合せた授業が展開できる。

このフォーマットでハンドアウトを作成するには、あくまでも完全なニュース原稿が入手できなければならない。早朝に録画した英語ニュースを授業で即座に使用する際、原稿の入手が困難なときは、おおまかな内容把握を確認するタスクや明瞭に聞き取れる部分（10秒ぐらい）のディクテーションを行うとよい。また、聞き取れる語彙項目を書き取らせ、数名に板書させコメントする方法もある。さらに、聞き取りを容易にするためには、“focused listening”（特定情報の聞き取り）を導入し、クラス全体をいくつかのグループに分け、動詞、形容詞、名詞、数字など、特定の種類の語彙項目だけを書き取らせ、同じ特定項目を充てられたグループ同士で競争させる方法もある。

2-1-3 : Frequency

このタスクを大学の授業で行うとなると、週1回の頻度で1、2ユニット消化するのが限度である。学習の効果を考えると、初級用で1日3ユニット、中・上級用で1日2ユニットをある一定の期間継続する必要がある。課題として出すには、あまりにも膨大な量になるので、熱心な学生に収録テープをダビングしてあげ、ハンドアウトを渡すか、自前のウェブサイトファイルとして公開しておくこともできる。

4-1-4 : Feedback

このフォーマットでは、ステップ2のタスクが終了するごとに解答する方法と、解答せず次へ進む方法とがある。あまりテンポよく教師が一方的に解答していくと、教師の解答に依存し深く考えなくなってしまう懸念がある。1度聞いただけではステップ1を解答できない学習者も少なくないはずだから、次のタスクの最中に分かれば戻って解答してもよいとした方が適切、と判断できる場合もあるだろう。

教室の中では、何人かを指名して解答させることもできる。ペアワークで少し話し合わせてから解答するのもよい。やや時間の余裕を与えることが大切である。

FIGURE 1 VOA Special English

1 : 台湾暴風に襲われる

STEP 1. Listening Warm-up (事前情報の提示)

まず以下のキーワード 7 の意味を確認しましょう。次に、これらのキーワードがニュースの中でどのように使われているか、確認してください。

- a) storm …………… 嵐
- b) hit …………… ～に襲来する
- c) missing …………… 行方不明の
- d) landslides ……… 地すべり
- e) flooding …………… 洪水
- f) move across …… ～を横切る
- g) strait …………… 海峡

STEP 2. Listening for Comprehension (5 W 1 H の把握)

Task 1 : テープを聞いて、まず次の質問に英語または日本語で答えてください。

Question: What damage did the storm cause to Taiwan?

Task 2 : もう一度聞いて、質問の答えとして最も適当なものを記号で選んでください。

Question: How many people have not been found yet?

- a. 1
- b. 10
- c. 20

Task 3 : もう一度聞いて、次の文が本文の内容に合っていれば T、合っていなければ F を選んでください。

- 1: It is the first time a major ocean storm hit the island this year. (T / F)
- 2: The storm is likely to grow stronger when it crosses the strait. (T / F)

STEP 3. Listening for Perception (音声認識)

最後にテープを聞いて、空欄の中に聞き取った語句を入れてください。

 IN WEATHER NEWS: A powerful ocean storm hit Taiwan (1: ____). One person was killed; ten others were missing. Rain and strong winds have (2: ____) landslides and flooding. This is the second (3: ____) ocean storm to hit Taiwan this year. Experts (4: ____) the storm will grow (5: ____) as it moves across the land. However, they (6: ____) the storm could regain strength as it moves across the Taiwan Strait (7: ____) China's southeast coast.

ニュース原稿

IN WEATHER NEWS: A powerful ocean storm hit Taiwan Tuesday. One person was killed; ten others are missing. Rain and strong winds have caused landslides and flooding. This is the second major ocean storm to hit Taiwan this year. Experts believe the storm will grow weaker as it moves across the land. However, they say the storm could regain strength as it moves across the Taiwan Strait toward China's southeast coast.

語彙解説 よく読んで今後の学習に役立てましょう！

- [] powerful [■] 図「強力な」(=full of force) 反意語は“powerless”(無力の)。
- [x] ocean [■] 図「海洋」形容詞形は“oceanic”。
- [x] storm [■] 図「嵐, 暴風」(=violent weather, including strong winds)
- [x] hit [■] 動「襲う, 達する」(=arrive at)
- [x] missing [■] 図「行方不明の」(=not yet confirmed as alive but not known to be dead)
- [] landslide [■] 図「地すべり」“landslide victory”で「(選挙の)地滑り的大勝利」。
- [x] flooding [■] 図「洪水」動詞は同形で“make a place covered or become covered with water”(～を水浸しにする)の意味。
- [x] major [■] 図「大型の」(=large, great in size)「小型の」は“minor”。
- [x] expert (s) [■] 図「専門家」(=a person with special knowledge or training)
- [] grow weaker [■] 動「(徐々に)弱まる」「急激に弱まる」は“turn weaker”。中立的なのが“become weaker”。
- [] move across [■] 動「～を横切る」(=move from one side to another side of)
- [] regain [■] 動「再び得る, 盛り返す」(=gain again)
- [] strength [■] 図「強さ」「勢力」「gain strength」で「勢力を増す」, “lose strength”で「勢力を失う」。動詞形は“strengthen”(=make something stronger)。
- [] strait [■] 図「海峡」英国では複数形の方が一般的。例: “the Straits of Dover”(ドーバー海峡)もっと広いのは“channel”。例: “the English Channel”(イギリス海峡)。

全文訳

天気ニュース: 大型の海洋性の暴風が火曜日, 台湾を襲いました。1人が死亡, 10人が行方不明になっています。雨と強風で地滑りと洪水が発生しています。大型の暴風が台湾に上陸したのは今年になって2回目です。専門家は暴風雨は同島を横切りながら弱まっていくと見えています。しかし, 台湾海峡を横切り中国南東海岸部へ移動する際に再度勢力を盛り返す可能性があるとして述べています。

ANSWERS FOR STEP 2

- Task 1 → Rain and strong winds have.
- Task 2 → a
- Task 3 → Statement 1: F / Statement 2: F

FIGURE 2 VOA Regular English

Biometrics For Identification

STEP 1. Listening Warm-up (語彙項目の確認)

まず以下のキーワード7の意味を理解し、一度聞いて聞き取れるかどうか確認してください。

1. law enforcement officials=police
2. a host of=a lot of
3. configuration=shape
4. trait=characteristics
5. tiny=extremely small
6. spectacular=unusually interesting and impressive
7. project=judge or calculate using the information one has

STEP 2. Listening for Comprehension (5W1Hの把握)

Task 1: テープを聞いて、まず次の質問に英語または日本語で答えてください。

1. What have law enforcement officials long used to identify criminals?
2. Why have law enforcement officials used them?

Task 2: もう一度聞いて、次の文が本文の内容に合っていればT、合っていなければFを選んでください。

1. Law enforcement officials have replaced fingerprints with other means of identification. (T / F)
2. Various ways of identifying people have been used for things such as credit checks. (T / F)

Task 3: もう一度聞いて、本文の内容に合うように最も適当なものを選んで文を完成させてください。

1. The way a person — is unique enough to identify his/her traits.
(A) hears (B) writes (C) speaks
2. "Biometrics" involves the use of computer technology to measure — characteristics.
(A) physical (B) behavioral (C) physical or behavioral
3. Richard Norton projects that biometrics will grow to be a — dollar industry.
(A) 20 million (B) 170 million (C) 3 billion

STEP 3. Listening for Perception (音声認識)

最後にテープを何度も聞いて、空欄の中に聞き取った語句を入れてください。

.....
 The configuration of (1: _____), the iris of (2: _____), speech patterns all these, (3: _____), are unique and therefore identifying characteristics. (4: _____) using computer technology to (5: _____) those physical or behavioral traits (6: _____) "Biometrics." Richard Norton, Executive Director of the trade association for U.S. biometrics companies says the tiny industry's growth (7: _____) spectacular. [38 seconds]

Transcript =====

- A: Because each person's fingerprints are unique, law enforcement officials have long used fingerprints to identify criminals. But modern science offers a host of more effective means of identification. And, Linda Cashdan reports, in the wake of last week's terrorist attacks, the new technologies are getting much attention.
- B: The configuration of [a face], the iris of [the human eye], speech patterns all these, [it turns out], are unique and therefore identifying characteristics. [The science] of using computer technology to [measure] those physical or behavioral traits [is known as] "Biometrics." Richard Norton, Executive Director of the trade association for U. S. biometrics companies says the tiny industry's growth [has been] spectacular.
- C: As recently as 1995 we were selling only, maybe, 20 million dollars worth of goods and services. This year we expect to sell at least 170 million and we project by the year 2010 it should be a three-billion-dollar industry at this rate.
- B: That's because these ways of identifying people have been used for everything from arresting criminals to establishing identities for credit checks and access to facilities.

Vocabulary View よく読んで今後の学習に役立てましょう！

- [1] fingerprint [■] 図「指紋」
 [2] law enforcement officials [■] 図「(警察などの) 法執行当局」
 [3] a host of [■] 図「多くの, 大ぜいの」
 [4] in the wake of [■] 副「～の後に」
 [5] configuration [■] 図「形, 外形, 輪郭」
 [6] iris [■] 図「瞳」
 [7] trait [■] 図「特徴」
 [8] tiny [■] 図「とても小さな」
 [9] spectacular [■] 図「目を見張るほどの」
 [10] project [■] 動「～であると見積もる」

Translation =====

- A: 人の指紋は皆違うので, 法執行当局は長い間指紋を犯罪者の割り出しに使ってきました。しかし, 現代の科学の恩恵で, より効果的な特定法があります。リング・キャッシュダンが新しい科学技術が先週のテロ事件の後で注目されてきている様子をお伝えします。
- B: 顔の輪郭, 目の瞳, 声紋などは皆人によって違いますので, 特徴を割り出してくれます。コンピュータ技術を駆使してこれらの身体的, 行動的特徴を特定する科学は「生物測定学」として知られています。米国の生物測定学企業の労働組合のリチャード・ノートン組合長は, このちっぽけな産業の成長には目を見張るものがあると述べています。
- C: ついこの間の1995年には, 我々の業界資産は2千万ドル足らずでした。今年はそれが少なくとも1億7千万ドルに達する見込みですし, この率で行くと, 2010年には30億ドルになるはずです。
- B: その理由としてあげられるのは, 人物の特定法が犯人の逮捕から, クレジットカードや施設への入場の際の本人確認などにも使用されてきているからなんです。

Answer for STEP 2 =====

- Task 1 → 1: Each person's fingerprints.
 2: Because each person's fingerprints are unique.
- Task 2 → 1-F 2-T Task 3 → 1-C 2-C 3-C

2-2 : SPEAKING

リスニング素材の分類にあるように、発話行為はモノローグとダイアログとに分けられる。モノローグは、一定のメッセージを1人の話者が一方的に発するもので、聞き手からの直接的なフィードバックがない発話形態である。ダイアログでは、発したメッセージに対し何らかの即時フィードバックがあり、言い換えや発音の修正、繰り返し、強調などの発話を調整することがある。すなわち、インタラクションがあり、リスニングも同時に行う活動である。

メディア英語を使用したスピーキング活動には、モノローグの場合は聞いたり読んだりしたニュースの概略を英語で口頭発表するオーラルプレゼンテーション、ダイアログの場合は、コミュニケーション・ギャップを利用したペアワーク、ニュースキャスターや特派員に扮するロールプレイ、ハンドアウトなしで口頭で解答させるQ&A、さらにディスカッションなどがある。

2-2-1 : Data Collection

データ入手には、基本的にリスニングのときと同じ方法をとるが、ロールプレイのことを考えると、ラジオより画像のあるテレビのニュースの方が有益であるかも知れない。しかし、原稿の入手可能性を優先させると、VOAなどのラジオを選ぶことになるだろう。ラジオでは、画像がなく、視覚的には模倣できない分だけ想像を働かせて、音声情報から各グループで個性豊かで多彩で自由な演出が期待できることも確かである。

コミュニケーション・ギャップ活動には、英字新聞に毎日載っている求人広告(classified ads)や天気予報の図表が利用できる。

2-2-2 : Task

oral presentation

30秒から1分程度の長さのニュースを聞かせたり、原稿を読ませた後に、

要旨をまとめて言わせる。一応、30秒程度の制限時間を設けてさせる方がよい。レベルによっては、英文ではなく日本語のニュースや記事を読ませることも考えられるが、母語に依存するタスクを続けていると、いつまでたっても日本語で考えてから英語に訳す癖から脱却できない。また、曖昧な点などがあれば、教師は中断させて5W1Hに関する質問を出して誘導したり、必要に応じて何度もニュースを再生させてもよい。

教室での活動としては、一定時間の制限のもとに発表した後、他の学生との間に質疑応答の時間を設けるべきである。事前に質問しやすくするために模範質問などを列挙したハンドアウトや質疑の決まり文句などを事前または質疑の途中で提示することもできる。

教室外でこの方法を持続させると完全なモノログとなるので、教師からのフィードバックを提供するためには、課題としてオーディオテープに吹き込ませて提出させ、授業中に再生し、他の学生にも聞かせる方法と、テープを1本ずつ教師がていねいに聞き、個人的な指導を行う方法がある。

教師や他者の助けのない完全な独習の場合は、吹き込んだ自分のプレゼンテーションを再生し、自分で修正すべき箇所を発見し、録音を繰り返すことが考えられる。また、このように自力でできるだけ修正を繰り返し、改善したテープを提出するように奨励することも大切である。教師のフィードバックに完全依存する姿勢を育ててはならない。学習者個人の全体的SLAを考えるならば、自立的学習を促進させる工夫を怠ってはならない。

communication gap activities

広告を例にとると、まず英字新聞の一部を切り抜き、2枚コピーし、それぞれ同じ数の空欄を修正液を使って違う箇所に作る。一方の消された部分が他方では無修正の状態となり相互補完的な一對のハンドアウトを作成する。自らの欠けた部分を、英語で交互に尋ねて完成させる。

例えば、以下にある広告から続くAとBの2つのハンドアウトが完成できる。これをクラス全体に半分ずつ配布すれば、一斉に同一のタスクができる。

レベルに応じて空欄の選択や数を変えることにより、同じ素材を多目的に活用できる。新しいパラグラフでこの種のタスクを行う場合は、まず手本として情報の引き出し方を示さなければならない。例えば、Aのハンドアウトを持った学生が、1番目の空欄に入れるべき情報をBのハンドアウトを持った学生から引き出すためには、“What kind of company will(would) put this ad?”がひとつの可能な質問となる。そしてBの学生が、“an international television broadcast company”と完全に答えてくれれば問題ないが、“an international”を省いて答える可能性もある。こうなると、Aの学生はそれが正しいか判断できないし、Bの学生もほんとうに相手を満足させる情報を提供できたか判断できず。これを防ぐためには、あらかじめ空欄の前に語数を提示すればよい。また、教師が期待するような質疑応答ではなく、一方が途中まで音読して次に何を入れるか聞くような手抜きを学習者がすることも考えられるので、注意が必要である。

オリジナル

Host Broadcast Services, an international television broadcast company, requires experienced drivers during May and June 2002 to be based at 10 football stadia across Japan. Applicants must speak/read Japanese and

English and be able to drive 7-seater wagon-type vehicles. Uniforms supplied. Please reply to : drivers@hostbroadcastservices.com Please allow up to three weeks for a reply.

ハンドアウト A

Host Broadcast Services, (_____) company, requires experienced drivers during (_____) to be based at 10 football stadia across Japan. Applicants must speak/read Japanese and

English and be able to (_____) Uniforms supplied. Please reply to : drivers@hostbroadcastservices.com Please allow up to three weeks for a reply.

ハンドアウト B

Host Broadcast Services, an international television broadcast company, requires (_____) during May and June 2002 to be based at 10 football stadia across Japan. Applicants must (_____) Japanese and

English and be able to drive 7-seater wagon-type vehicles. Uniforms supplied. Please reply to : (_____ @ _____) Please allow up to three weeks for a reply.

role play

最初はグループに分けて音読から徐々に原稿を見なくても言えるように練習させ、最終的には特定のグループにクラス全体の前で演じてもらう。または、課題としてビデオに収録し提出させる方法もある。これは、背景にセットを用意したり、外に出て行って実況している様子を演出するなど、創意工夫されるプロジェクト学習としての効果が期待できる。

VOAの放送形態を合わせたロールプレイの基本形は、メインキャスター1人、特派員1人、専門家か取材を受けた1人、計3人からなるグループ形成が適切である。ただし、なるべく3人の発話量に差が生じないことが望ましい。例えば、以下のニュース原稿は比較的分量に差がない例である。これはニュース本編の一部であり、全体としては2分程度の分量である。実際、ひとり1ターンよりも2ターンあった方が自分のターンが終了次第緊張がほぐれ、タスクから離脱するのを防ぐことができる。

- A: It's 5:15 Universal Time. A long investigation of police corruption in the west coast city of Los Angeles is biting down and prosecutors will soon close it down. Although the probe is ending, Mike O'Sullivan reports Los Angeles will be smarting from the scandal for sometime.
- B: The two-year investigation began with the department's Rampart division and then spread to several other department offices. Los Angeles district attorney Steve Cooley says he is ending the inquiry after uncovering numerous cases of police misconduct.
- C: We fully expect to have the Rampart matter concluded by the end of this year, and we do not expect any more criminal filings of any officers relative to the Rampart investigation.

このニュース原稿の場合、Aがメインキャスター、Bが特派員、Cが取材を受けた人である。それぞれの名前の部分に学生の名前を代わりに使うと親近感が湧く。また、地名やその他の固有名詞を身近な実在するものに変えても構わないだろう。ただし、上の例はインタビューではなくリレー形式で別々

に収録したものを編集して放送したものであり、発言者間のインタラクティブがない。よりコミュニケーション的なロールプレイを行う場合は、以下にあるインタビュー形式 (VOA News Press Conference U.S.A.より抜粋)が適切である。

A: Cathy, welcome to our program.

B: Thanks for having me, Niel.

A: Uh, to start off with, just how big is the tourist industry in the United States?

B: As the tourist industry is quite large, it's actually the third largest retail sales industry in the U.S. And I don't think most people realize that we've served only behind, uh, food and auto sales. So, people have to eat, have to drive and they feel they have to travel.

A: So, when they travel, they do a lot of other things, buy things, buy gasoline and make some kinds of cars in advance to make this trip. So, I can see there is multiplier effect in their places, too.

B: Exactly, there really is a multiple effect and travelers do consume quite a bit when they are traveling. You have everything from, uh, shopping for souvenirs or, uh, clothes or shoes or items to remember when you trip by to purchasing, you, you're consuming, you're staying at hotels, you're visiting attractions. There, there is quite a few things that people spend their money on, which is all good for the U. S. economy.

A: It sure is. Uh, let me back up a little bit. I guess historically vacations were the preview of the rich. But I presume now almost everybody takes vacations of some sorts.

B: Yes, that's really true. It's interesting how vacations have changed over time. I think probably 30 years ago, there was more people, saving for a year or two years and putting their pennies together to save that for one big special trip. And you took two years in the middle of summer. And you either drove across the country or in some cases, you went to destination outside the United States. That really changed now. People simply don't have a time to do that anymore. For most part, people don't have the time. So, we've seen arisen weekend trips. People take shorter trips and multiple trips throughout a year. Consumers are taking up to 10 trips throughout a year. And it enables them to take different kinds of trips.

語彙の習得や報道独特の言い回しなどを覚え、また演じる楽しさを体験することにより、ニュースを親しみを持って聞くようになる態度の改善が期待できる。ただし、このロールプレイの方法は、英語の暗唱コンテストと同様、丸暗記しているだけで学習者に創造的な発話の機会を提供することはない。創造性(creativity)を高めるには、原稿の一部を空欄にし自由に言わせたり、上級者にはニュースの概要と役割分担だけを指示して、即興で自由に発話させることも一案である。

questions & answers

これは、リスニング用のタスクをハンドアウトを見て解答するのではなく、口頭で質疑応答する方法である。まずは、リスニングのときと同様にテープを一度聞かせて、図2のTask 1にある“What have law enforcement officials long used to identify criminals?”と“Why have law enforcement officials used them?”の質問に対し、指名した学生に口頭で答えさせる。さらに、他の学生にも聞いて、一番の解答を引き出すまで続ける。

また、Task 2については、Fと答えた学生に対して“What is not true in the sentence?”などと追求し、本文の内容を表すように文の一部を直させることも考えられる。

Task 3については、空欄の前まで読んでそこから先を答えさせたり、疑問文に変えて質問し答えさせる方法もある。例えば、“The way a person — is unique enough to identify his/her traits.”は“What is unique enough to identify his/her traits?”となり、“Biometrics involves the use of computer technology to measure — characteristics.”は“What does the computer technology that biometrics involves measure?”となり、“Richard Norton projects that biometrics will grow to be a — dollar industry.”は“What does Richard Norton projects that biometrics will grow to be?”となる。

discussion

ディスカッションをする際は、学習者のレベルに応じて、教師による導きがある程度必要である。日頃討論することのない日本の大学生が、まして英語で討論するとなると、目的と手段の双方が不足しているために進行しない。また、ある程度の英語力に達していない学習者に対しては、まず日本語でさせてみる必要がある。

メディア英語を使用したディスカッションは、特定の事件などを取り上げ、ビデオを見せたり資料などを読ませ、内容スキーマを喚起させて会話が進展していくような工夫が必要である。そのためには、ある程度の質問項目を教師が用意して来なければならない。例えば、2001年9月11日に米国で発生した同時多発テロを扱う場合は、

- 1) How do you feel about the attacks?
- 2) Why do you think the terrorists attack the buildings?

などの質問を板書するかハンドアウトに書いて配布し、各自に自問自答させる。しばらくしたら特定の学生に質問し答えさせる。その後、ペアワークで交互にこの質問をし合うようにし、さらに1人加え、グループサイズを段階的に大きくしていき、最終的には大人数の中でも堂々と発言できるようにしていく。また、用意した以外の質問などをするように奨励する。また、質問だけではなく、討論でよく使われる表現をまとめて教えてチャンクとして覚えさせ、さらに入れ替えドリル (substitution drill) などしながら、自分のメッセージを自由に言い表わす練習をさせることも大切である。

2-2-3 : Frequency

これらの活動は、できれば毎日するのが望ましいが、現行の大学のカリキュラムでは限界がある。最初からテロ事件を扱うのではなくもっと簡単な天気の話などから始め、年間を通じて背景知識が必要なものへと徐々に移行していくほうがよい。

2-2-4 : Feedback

発話に対するフィードバック、特に“error”と“mistake”に対する修正の是非についてはかなりの論争がある。授業の力点を“accuracy”に置くか“frequency”に置くかという二分法でいくと、スピーキングは一般的に後者を重視する。発話の途中で何度も直していたのでは、学習者が畏縮してしまうためである。しかし、まったくフィードバックなしで放置していたのでは、不正確な表現が身につけてしまい、場合によっては化石化 (fossilization) してしまうことが危惧される。この矛盾を解決すべく、小林(1995)は、対策として“retrospective feedback”(回顧修正)という手法を提言した。これは学習者の発話をオーディオテープやビデオテープに収録し、あとで教師と学習者が一緒にそのテープを聞きながら、修正や意味の確認などのフィードバックを与え、さらにもう一度発話させる手法である。すなわち、これは、発話と修正との間に時間差をもうけ、上記の矛盾の解決を図ったものである。

2-3 : READING

従来、メディア英語を活用したリーディング活動は、英字新聞や雑誌などのハードコピーが中心であったが、今日では、各新聞、雑誌、放送局が公開している無料サイトの文書や資料に移行しつつある。最新の情報を即座に手軽に必要な部分だけ無料で入手でき、教師と学生の双方にとって好都合である。インターネットの発達にともなう情報収集のあり方について、Nunn(1999)は次のように述べている。

College students who are called upon to study international news stories can now access a very extensive range of sources on the Internet or on satellite television. In theory, this provides them with an unprecedented opportunity for obtaining a greater variety of angles on the same story. It is now possible to instigate a web search on almost any story, making it much easier for the students to develop his or her own approach to the information independently of the teacher. (p.59)

リーディング活動は、伝統的な範疇として、読む速度 (rate of speech) と理解度 (comprehension) を基準にすると、精読 (intensive reading) と多読 (extensive reading) に分けられる。また、読む目的を基準にすると、斜め読み (skimming) と走査法 (scanning) に分類される。授業および自立的学習活動においてこれらの 4 つの手法を取り入れた指導と練習が基本である。

リーディングは、教室外での自主的な学習態度がなければ上達が望めない。そこで、教室内では同一の英文を対象に読み方の説明を行うが、教室外での活動や課題について、なるべく学習者個人のニーズと興味に合った内容の英文を読ませることが望ましい。

リーディングを支える要素として、学習者はふだんから日本語の新聞、雑誌やテレビ、ラジオ等のメディアやその他の図書を通じて時事問題に対する関心を高め、内容に精通するよう心掛けるべきである。

同時に、語彙力増強のために不断の努力を心掛けなければならない。リーディングは、語彙習得と密接な関係にあり、切り離せない。例文なく文脈と切り離れた語彙表を見るだけの語彙増強は記憶の保持 (retention) が弱く、それを発信型の語彙に発展するのは困難である。文脈を提供してくれるのは英文であり、その英文も強力な語彙力の裏付けがなければ読み続けられない。そのためには、精読の段階でしっかりと不明語彙項目を整理することが大切であるが、メディア英語の語彙項目については、従来の英和、英英辞典だけでは不十分であることが多い。正確な英文の理解と語彙の意味を確認するためにも英文の完全翻訳を入手することが不可欠である。幸いなことに、今やインターネットの発達でその入手は容易になった。

2-3-1 : Data Collection

メディア英語のデータは、新聞、雑誌などの実物であるハードコピーとウェブサイトで公開されている電脳文書 (cyber documents) に分類される。コードコピーは、店頭販売や購読の形で家庭に届けれる。大学の附属図書館には、最低 1 紙は英字新聞が設置されているはずだ。電脳文書は、公開され

た特定の文書をモニターを通じて閲覧することが可能で、印刷することもできる。

従来の英字新聞のコードコピー版は、購読料として月間 2500 から 3500 円がかかる。地方では、配送が遅れ、情報源としての価値が下がってしまっている。さらに、保存場所にも手間取る上、読まずにどんどん溜まっていき、そのうち読む気を失ってしまう危惧がある。

電脳文書の利点は、ファイルに落として加工や保存が自由にできる点である。初級者用に語彙を書き換えたり、空欄穴埋めの演習を作ったりして、自由に教材作成ができる。保存しておけば、必要なときにいつでも引き出せ修正も可能だ。しかし、無料公開されている記事がハードコピーと全く同じであるとは限らず、一部カットされていることもある。また、投書や地方版などは省かれている。ただし今は、有料だが完全版のものも配送されている。

両者の特徴を総合して考えると、どちらかをひとつだけ選ぶとしたら電脳文書を利用するのがよいだろう。コンピュータ画面を見ながら多読し、何かじっくり読んでみたい記事があったらプリントして精読するという使い分けが可能だからである。

精読の際に必要な和文の翻訳は、必ず入手するようにしたい。国内ニュースなどの翻訳英文記事であれば、オリジナルの和文記事を手に入れることが可能だ。しかし、日本で発行されている英字新聞のうち、The Daily Yomiuri、Asahi Evening News、Mainichi Daily News は翻訳が入手できるが、英語版のみの The Japan Times は入手できない。また、電脳文書は、英字新聞ではクリックひとつで読売新聞のサイトのように日英自由に表示を変えられるものもあり、雑誌では『TIME』誌、放送局では『CNN』のサイトが一部日本語訳も表示している。ここで注意しなければならないのは、英字版で精読したいと選んだ記事の翻訳版がたまたま出ていないことがよくあるということだ。一般に、第1面のトップニュースや社説は、翻訳されている可能性が高い。日本の英字新聞では、スポーツ記事の多くが海外の通信社からの配給記事であり、この分野での翻訳版の入手はあまり期待できない。

英字新聞と雑誌

教材の選択にあたっては、データの入手方法だけではなく、英文の難易度についても考慮しなければならない。英字新聞、雑誌、ニュース原稿の3つを比較すると、語彙・構文については、英字新聞とニュース原稿は類似点が多い。例えば以下は平成13年10月1日の皇太子妃の出産を伝えるインターネット上で公開された英文である。

英字新聞(The Japan Times) TOKYO, Dec. 1 — Japanese celebrated the birth of a princess today with bittersweet cheers, their joy at the first offspring of the next emperor tempered because there still is no male heir. The girl was born to Crown Princess Masako, 37, and Crown Prince Naruhito, 41, whose failure to produce an heir in eight years of marriage has caused worries about the future of the world's oldest imperial family.

英文雑誌(TIME) Inside Togu Palace in central Tokyo, royal handlers are busily and secretly preparing for an event that will breathe new life into Japan's cloistered royal family. Crown Princess Masako is expected to give birth to her first child this week or next, ending an eight year wait that frustrated a nation impatient for a royal heir to the Chrysanthemum Throne, which in mythological terms, anyway, is said to date back more than 2,600 years.

ニュース原稿(VOA News) Japan's Crown Princess Masako gave birth Saturday to a daughter. As VOA Correspondent Amy Bickers reports from

Tokyo, the birth of a girl raises the possibility of a succession crisis for the world's oldest hereditary monarchy. A top official of Japan's Imperial Household Agency announced Saturday that both mother and daughter are well, following the baby's birth at 2:43 p.m. local time. When the announcement was made, crowds of Japanese surrounding the gates of Tokyo's Imperial Palace cheered and clapped.

雑誌については、やや読者層の教養が高いために、散文調の凝った表現が目立つ。Ota & Otsu(2002:4)のように、『タイム』誌について、「英文は明晰であり、時事英語の範とすべきものです」という見解がある一方、Ito(1986)のように、タイム誌への英語学習者の思い入れを「TIME 信仰」と呼び批判する意見もある。彼は日本では一般に効果的と考えられている学習法の中には誤解があるとして以下のように酷評している。

TIME の文体が世界一格調高く、すばらしいと信じて疑わず、自分でも TIME のような英語を書こうと必死に試みるが、結局はいたずらに言葉をもてあそぶだけに終わってしまうというものである。(p.17)

彼は同誌が散文あるいはクリエイティブ・ライティングとしては、格調高い文体であることを認めつつも、コミュニケーションの手段としての英語という観点からは教材として不適切である、と断言している。

本名(1993)は、米国で起きた難解な語句、複雑な構文、婉曲表現を含まない平易かつ洗練された英語を求める“Plain English Movement”(p.100)に言及し、その中で英語の読みやすさの指標となる Flesch(1979)による「フレッシュスケール」を紹介し解説している。それによると計算式は、

$$\text{総語数} \div \text{総文数} \times 1.015 = X$$

$$\text{総シラブル数} \div \text{総語数} \times 84.6 = Y$$

$$206.846 \cdot (x+y) = z$$

Zの値が小さいほどテキストは難解であるということになる。本名の調査によると、専門の科学文書が30、『タイム』誌が45、聖書が60、『ピープル』誌が75という。また、米国の学校教育のレベルとの関連では、高校が50~60、大学が30~50、大卒が0~30であるという。あくまでも、これは英語母語話者に関する指標であるので、それでいくと『タイム』誌は米国の大学生レベルの読み物であり、高校生にはレベルが高いものということになる。このことから、英語を母語としない日本の大学生については不適切であることが伺われる。英字新聞についてはデータがないのが残念であるが、大衆雑誌の『ピープル』誌ぐらいか、それ以下の難易度となるのではないかと思われる。

前出の Ito (1986) は、日本で発行されている英字新聞の国内ニュースは「和文英訳の域を出ていない場合が多い」(p.17) と述べている。この見解は従来から多くの購読者や英語教育者によって語られてきたが、主観的な憶測に過ぎなかった。小林(1999)は、これを実証するために、The Daily Yomiuri, Asahi Evening News, Mainichi Daily News の翻訳記事(同一期の同一また類似テーマの英訳社説)に The Japan Times を加え、米国の The Washington Post, The New York Times, USA Today、英国の The Times, The Guardian, The Independent と比較した。443人の日本人大学生にほぼ同一の内容の社説を読んでもらい、理解度と不明語彙項目数を調査、さらに日本の4紙の社説を英語教師を中心とする英語の母語話者106人に読んでもらい、文法性(grammarality)、明解性(clarity of meaning)、自然さ(naturalness)、構成(organization)の4つの基準について、主観的評価(metalinguistic judgment)をしてもらった。多くの発見があった中で特記すべきなのは、英米の英字新聞の方が、日本語母語話者には理解が困難で不明語彙も多いこ

とが判明、さらに、もっとも彼らが明解に理解できた社説が英米人にはもっとも理解しにくい上に、他の基準も低く評価された点である。日本で発行されている英字新聞の中では翻訳のない The Japan Times の社説が英語母語話者から高い評価を受け、翻訳社説の3紙の中では、Mainichi Daily News が英語母語話者の全ての評価において、他を統計的有意差を持って引き離れた。

2-3-2 : Task

学生には、精読と多読を毎日するよう指導すべきであるが、多読については教室内で実施し難い。しかし、ここでは両者を別物として扱うのではなく、連続したタスクとして位置づけ、多読から精読へと移行するアプローチのひとつを紹介する。物理的相違から、従来のハードコピーの場合と電脳文書の場合についてそれぞれ説明する。

ハードコピー

ハードコピーを使用する場合は、新聞の1面を使用する。同じページを何十人分も用意することも A3 サイズの2倍以上の大きなコピーを取ることも現実的ではないので、ひとりずつ1日分の古新聞を配布する。それぞれ異なる日付の新聞を持っているので特定記事の内容を解説したりするのではなく、毎日の日課として新聞を使った多読の仕方を教える。以下のステップで解説する。

STEP 1: 特定のページを選ぶ。

毎日継続して英字新聞を読ませるには、新聞の隅々まで読ませると無理が生ずる。たとえそれが多読であっても、現実的ではない。指導法としては、1ページだけ「読み」、他のページは「見る」ように指導する。一般的には、第1面に重要な記事があるので読むように指示するといいいが、スポーツ好きにはスポーツ欄をすすめ

るなどして個性化するのもよい。

STEP 2: ヘッドラインとリードを赤いマーカーで囲む。

1 ページだけといっても、学習者にとって全部読むのはかなりの負担である。多読であっても 30 分～1 時間はかかる者もいるだろう。そこで初期の頃は、大胆に軽減してヘッドラインと 5W1H を要約した第 1 段落であるリードだけを読ませる。どこが該当するところか分かりやすくし、ひとつの記事を読んだら迅速につぎの記事へ移動できるように、3 分ほど時間をかけてそのページのヘッドラインとリードを赤のマーカーかボールペンで囲ませる。この作業は慣れて来たら省略してもよい。記事によって分量が違うものだが、この 2 ケ所だけに限定すると、みなほぼ均等の分量になるはずである。

STEP 3: 囲み部分をじっくり読む。

赤ペン等で囲んだ記事をじっくり読む。この段階では早く読ませる必要はない。分量が少ないので、全部合わせても記事ひとつぐらいの量にしかならない。大学生の場合、10 分から 15 分時間を与えれば十分だろう。多読とは、一般的に 70 パーセントぐらいの理解度で多くの記事を斜読みすることであり、全部均等に読まなければならないということではない。各記事の限定された中心部分だけをじっくり精読し、たくさん読むこともまた多読なのである。ここでの注意点は、この段階はまだ多読であるので、未知の語彙項目があっても辞書には頼らず読み進めるよう指導することである。さらに、複数読んだ記事の中からひとつ、じっくりとその本文も読んでみたいと思うものを選ばせる。

STEP 4: 選択した特定記事を斜読みする。

興味ある記事を選ばせたら、その記事全体を赤のマーカーで囲ませる。また、その部分だけを切り抜かせてもよい。その記事を斜め読みさせる。70 パーセントぐらいの理解度で、ゆっくりでもいいから読み進ませる。けっして目線を左に逆戻りさせてはいけない。英語の語順で意味を汲み取る練習をさせるためだ。不明の語

彙項目も無視し推測するように指示する。英字新聞は、段落が進むほど詳細な情報が与えられているだけではなく、一定の表現の反復を避けるため同義語などを多用する。そのため、2段落目で不明な動詞が3段落目で知っている動詞で表わされている場合がよくある。同様に、ヘッドラインで分からない語句もリードの部分で平易な表現に置き換えられている場合が多く、辞書などに頼らなくてもおおよその意味を把握できることがある。

STEP 5: さらに不明語句に下線を引きながら精読する。

引き続き精読の段階になるが、じっくりと時間をかけて、不明語彙項目に下線などを引きながら読み進ませる。頭の中でじっくり日本語に訳したり声を出させても構わない。ただし、和訳を書きながら理解させてはいけない。翻訳してその日本語を読んで理解するのは、本来のリーディングではない。それは翻訳講座などでやればよい技能訓練である。不明語句が後の段落で他の知っている語句に置き換えられている箇所が特定できた場合は、その不明語句の横にそれに代わる語句を書き添えるか、両者を線で結ばせる。この段階では、まだ辞書などに手を出させてはならない。

STEP 6: 内容の理解を確認するための質疑応答

精読した内容がどの程度正確に理解できているかを確認する作業をさせる。これがなければ怠けてしまう可能性がある。教室内では、内容について教師が何らかの質問を出し、学生に日本語または英語で解答してもらうことができるが、皆違う新聞を手を持っているので、あらかじめ教師がその記事の内容に関する具体的な質問をすることはできない。そのため、漠然としたどの記事についても聞ける質問を用意しておく必要がある。そのような質問は、学習者が独習するときにも、チェック表にしておくと便利である。この段階でも、辞書などには手を出させないようにする。例えば、次のような質問項目をあらかじめ作っておくことが考えられる。

- 1) What is the story about?
- 2) What is the most interesting about the article?
- 3) What do you think about the story?

この段階では、まだ不明語彙項目が多く含まれている可能性もあり、正確に答えることは困難と考えられるので、おおよその内容把握で構わないが、後で確認するために紙に答えを書かせる必要がある。

STEP 7: 不明語彙項目の解明と整理

ここで“post-reading activities”の段階に入る。誤解がないか内容理解を確認したり、不明語句を整理し語彙増強を計るステップである。まず、上のように自由にページを選ばせ、ひとつの記事をさらに選ばせ精読させるので、翻訳版やオリジナルの和文記事を見つけることは極めて困難である。ゆえに、辞書を片手に不明語彙項目を丹念に調べ、ノートなどに整理させる。できれば分野別の語彙ノート作らせ整理するように指導する。エクセル等のソフトを使って、ファイルに定期的に保存していくのもよい。不明語句が解明され、内容のより正確な理解ができたなら、さきほど紙に書かせた内容に関する解答を再度チェックする。できれば赤ペンで添削してあげるとよい。

電腦文書

ネット上のファイルでは、新聞のように広げて見ることができない。トップページに出ているヘッドラインから1ページ分に相当する数(5ぐらい)を教師が選ぶか、学習者に自由に特定の記事をランダムに選ばせてクリックさせ、ヘッドラインとリードを読ませる。

物理的相違から生じる大きな手順の違いは、赤ペンなどが使用できないことと、ステップ3の段階で特定の記事を選んだら次の作業である精読のためにプリントアウトさせることである。その後、ステップ6まで、ハードコピーのときとまったく同じ作業をさせる。大きな違いは、最後の語彙整理のステップ7である。

ハードコピーのステップ7では、不明語彙項目を辞書を片手に調べたが、電腦文書ではクリックすれば和文が入手可能で、より効果ある学習要素を組み入れられる。ただし、ここで注意しなければならないのは、読売新聞など

のサイトでは、日本語の記事が最新化されていても時間によっては英字版の英訳がアップロードされていない時間帯があることだ。各サイトの特徴を把握し、日英の記事が重なる時間帯などを前もって熟知しておく必要がある。

該当する記事の翻訳版(オリジナル版)をプリントアウトし、辞書を使う前に和文をすべてじっくりと読ませ内容を完全に理解させる。次に英文の方を上からじっくり読み進ませ、下線を引いた不明語句の部分に差し掛かったら、さきほど和文を読んだ記憶から意味を再度推測させ書き添えるように指導する。ここでは、けっして和文と付き合わせるのではなく記憶に頼らせるのである。あくまでも推測する訓練を組み入れる。最後まで行ってから今度は日英双方を照らし合わせながら、不明語句の意味を解明させる。ここでは時事英語が使用されているので、一般の辞書では出ていないような意味で使われていることもあるので、わかる語彙項目も念のため和訳と付き合わせてしっかりとチェックさせるようにしたい。不明語句とその他の語句を、ハードコピーの場合と同様に分野別にファイル化させる。

不明語彙項目については、英和の他に、レベルに応じて英英辞典を使用させる機会も作りたい。時間的に余裕があればなるべく英英辞典を使用させ、すべての不明語句の横に英文定義を書き添えてから和文を見て、日本語の意味をしっかりと確認させる。ファイル化するときもその定義文も添えるように指導するとさらによい。ただし、時事英語の場合、組織名や固有名詞や専門用語も多く含まれるので、名詞は英和、形容詞と動詞には英英辞典を使うなどの使い分けを指導することも大切である。

2-3-3 : Frequency

この多読と精読を合わせた手法は、教室内での活動としては週1回が標準であるが、できれば同じことを毎日続けるように何らかの形で課題にするとうい。個人差はあるが、1日60分から90分あればステップ7までの作業ができると考えられる。ちょうど大学の90分の1講義分に相当する。

2-3-4 : Feedback

このタスクのフィードバックは、発信技能と違い、和訳さえ入手できれば自己ペースで進められる。授業では、日々の学習を促進させるための確認だけでもよいかも知れない。または、精読として記事をひとつ取り上げて、全員で同一記事を読んで教師が解答することも可能である。しかし、読む作業とは、基本的に学習者各自が静かなところで各自のペースで行うものであり、スピーキングの一部やリスニングのようにインターアクションなしに進められる独習向けの活動と言える。

授業の形態としては、初期には教室外での作業を重視したタスクの手法を実践しながら説明し、あとは、週1回のコースの場合、学習の進度や、実際に毎日作業をしたかどうかをなんらかの形でチェックし、怠けないように管理することが大切である。授業のような強制の形態にない学習者が独習する場合は、なんらかの怠けないための環境を作る工夫が必要である。

2-4 : WRITING

メディア英語を活用した英作文は、報道された記事やニュースに対して自分の意見を表明するものと、和文の記事を英文に訳し、英字版(翻訳英文又はオリジナル英文)と照らし合わせて修正するものがある。前者の手法は、自分の意見を英文で書き表わすものであり本来の writing の姿であるが、後者の手法は、他人のメッセージを目標言語(target language)に置き換える翻訳(translation)である。残念ながら中学、高校では後者の指導しかしていないのが現状で、国立大学の二次試験で課される英作文も、ほとんどが和文英訳である。ゆえに、大学の新生入生にとっては、自分の考えを直接英語で表現する訓練をほとんど受けてきていないため、前者は大変な作業であり、文章の構造や組み立てを学ぶパラグラフ・ライティングなどの指導も受けたことがないため、センテンスのレベルを越えた英作文はたいへん難しく感じるはずである。

以下、まず前者の投書文の書き方指導を解説し、次に和文の記事を英訳す

る作業の指導法を解説する。

2-4-1 : Data Collection

投書

一般に、投書のためのデータは報道された記事や放送であり、このことは前述のリーディングのところで説明済みである。しかし、それにかぎらず、報道されていないが常日頃から関心のある事象について投書することも許されるはずである。日本語の新聞にも、マナーの悪い地下鉄の乗客のことなど日常のことがよく扱われている。なにも力んで自衛隊の周辺事態などのような大きな政治テーマを取り上げなくてもよいのである。

筆者は大学1年生、18歳の時から現在(36歳)に至まで絶やすことなく英字新聞を配達してもらっている。大学の4年間に40回以上投書したが、ほとんどが実際に新聞に載った。初めて自分の書いた英文が活字となっているのを見たときの感動は今でも忘れられない。日頃より世の中のさまざまなことに関心のある好奇心豊かな学生だったので、書く題材に不足することはなかった。しかし、たいいていの学生は、何を書くかという選択の壁にまずぶつかるに違いない。何か記事を読んでそれに対する同意や反論をするには、ある程度の知識が必要である。しかし、今の大学生の多くは、日本語の新聞さえも読んでいない。まして、英字新聞を購読している者は、数百人か数千人にひとりぐらいであろう。そう考えると、特定の報道に対する意見の表明よりも、日頃の関心事を英語で書く方が現実的である。

英語の力がある程度上達してくるとスピーキングとライティングの双方で“fluency”と“accuracy”が高まってくる。学習者は、こう言えるのではないかと推量し確信のないままとりあえず発信し、受信者の反応を見て調整する“hypothesis testing”(Elliot, 1981)を行う。これで、文法的に正確ではあるがネイティブスピーカーには不自然なところが、徐々に修正されていく。この発達段階を図解で示すと、図3のようになる。

また、投書でよく使われる表現などを知っておく必要がある。例えば、誰

FIGURE 3 Development in Oral Production (from Kobayashi, 1996: 142)

linguistic traits	communicative	accurate	natural
Novice	—	—	—
Intermediate	+	—	—
Advanced	+	+	+
Superior	+	+	+

か他人の投書になんらかの意見を言うときは、“I am writing in response to Mr. Johnson’s letter on June 28.”のような書き出しが一般的である。あらかじめ、こうした表現をどの位置で使えばよいかという知識があれば、考えをまとめやすくなり、組み立てもしっかりしてくる。市販されている表現集などを買い求めて覚えるよりも、たくさん投書例を読んで、将来使えると思ったら書き留めファイルし、必要なときに使う、いわゆる「英借文」の習慣を身につけるようにしたい。筆者は学部の4年間、特に1、2年生のときはほぼ毎日のように、投書だけではなく一般の英文記事から英借文し続け、ノート数冊の分量になるまで続けた。図4はその実例(1984年)である。

和文記事の英訳

英訳に使用する和文には、リーディングの際に入手したものをそのまま活用できる。ただし、よい見本となる英語を身につけるには、リーディングで使ったデータでも、なるべく翻訳英文記事ではなく英米の新聞記事か放送原稿にしたいところだが、英米の新聞では和訳が入手不可能である。CNNニュース(asia.cnn.com/)のサイトは日本語への切り替えができるようになっているが、日本語場面に切り替えても、その訳は出ておらず、数時間前のトップニュースの和訳が載っている。また、筆者が調べたところ、日本語の完全訳は見当たらず、部分訳や英語が出た後での翻訳作業中に入った情報を継ぎ足しているような訳のものがほとんどである。

データの入手のしやすさと完全な2カ国語テキストが入手できるという点を考えると、やはり日本で市販されている3大新聞(読売・朝日・毎日)の

FIGURE 4 著者の英借文例

- The Shell Oil Company said £ 18 million gasoline order would all go to Japan because it had found British pipe fail to meet its standards.
- ★ There remains a core of conviction that Japanese are Japanese.
- I wanted to see more people participating and being given the opportunity to share a real international experience.
- I dislike feeling superior to other people.
心に優越感をもつ
- ★ What was then confined to a small fraction of of the population is now shared by many millions.
- ★ Is it going to star to say that Japanese is quite different from others.
↑
 へと言えは、いさぎでしうか

英字版、それもオリジナルの和文を見つけやすい社説を使うのが望ましいと思われる。この利点は、和文英訳に見られる欠点を上回るものである。学習者にとって、見本となる英訳であることには変わりない。図5は、Mainichi Daily Newsのある日の社説と、そのオリジナルとなった日本語の一部である。

FIGURE 5 Mainichi Daily News のサイトからのダウンロード資料

英語画面

Monday, December 17, 2001

The fight against global warming

Having signed an accord that specifies rules for applying the Kyoto Protocol, countries around the world have begun to prepare domestic arrangements that will allow them to implement the global warming agreement from 2002.

On Dec. 14, the global environmental panel of the Environmental Ministry's Central Environmental Council completed a report on the domestic measures that Japan will have to adopt to pave the way to ratification of the protocol.

日本語画面

2001年12月16日

高い目標と危機感の共有で 温暖化対策

地球の温暖化防止を目指す京都議定書の運用ルールが最終合意され、国際社会は議定書の02年発効に向けて動き始めた。日本も議定書の批准のため国内制度を整える必要がある。

その国内制度の在り方を検討してきた環境省の中央環境審議会地球環境部会・小委員会は14日、基本的な考え方をまとめた。

読む場合と違い、翻訳の練習として使用する場合は時間がかかるので、見出しとリード、それにもうひとつぐらいのパラグラフぐらいにしておいたほうがよい。また、同じ新聞にある記事にこだわることなく、なるべく違う分野のものをデータとして入手するため、他の2紙についても日頃からウェブサイトをみて、必要に応じてダウンロードすることが大切である。

4-4-2 : Task**投書**

図6は、筆者が担当した英語科教育法受講生の投書である。英語の第2公用語化論が盛んだった時期だったので、筆者の講義と関連したテレビ番組や資料によって、自分自身の判断を下せるだけ十分な背景知識が蓄積された結果書けた内容である。20名ほどの受講生が、筆者の指示に従って第1原稿を書き、それに授業内でピア・フィードバック(peer feedback)を与え、書き直し、内容や構成についてさらに筆者の指導を受けるプロセス・ライティング(process writing)の手法を取った。20人中、テクニカルな問題で、実際には3名が電子メールで最終稿を投書し、そのうちのひとつが採用された。(図

FIGURE 6 英語科教育法の学生の投書文

printed on The Daily Yomiuri, Thursday, June 8, 2000

Letters To The Editor**Make English 2nd language**

I think that Japan should adopt English as an official second language. These days we need to communicate with foreigners because more and more people are going abroad or working with foreigners.

Technology has advanced in areas such as computers, the Internet, telecommunications and satellites. Many Web sites are in English. Also, the news we receive from foreign countries is often in English. Thus, if we understand English we will have access to a plethora of information.

Secondly, globalization gives us many chances to try to communicate with foreigners. For example, we both see and work with foreigners in Japan. Japanese tend to respect the English speaker. We should avoid learning English as just a language, which is one of many tools of communication. We should also learn about the culture and ways of communication of English speakers at the same time.

Thirdly, we need English for economic development. In recent years, consumers have been demanding goods that meet world standards. Furthermore, there has been a remarkable increase in multinational corporations. English is the language most commonly used in such business situations.

For example, when mother tongues are different, we generally use English as a common language. Thus, English is indispensable in business. But Japanese tend to depend on an interpreter to negotiate at ministerial-level meetings. In such circumstances, negotiations do not go well. Far from it—as we cannot negotiate on an equal footing.

English can solve both trifling and important problems. Learning English can help us get access to information and communicate easily with foreigners. Now English is also necessary to play an active role on the international field.

Saeko Okuse
Otaru, Hokkaido

6) これには本人も驚き、強く動機づけされた結果、大学の国際交流プログラムによる海外留学制度を利用しニュージーランドに留学した。

和文記事の英訳

実際に使用するには、丸ごとひとつの記事では量が多い。最初はリードだけに留めておき、その後も2、3のパラグラフに留めておく。たくさん訳すより少ない量をしっかり翻訳する練習を重視したい。

レベルに応じて、作文の種類も空欄穴埋めから、部分訳、全文訳へと移行する。上記のダウンロードした資料を加工すれば、以下のようなタスクが作成できる。

レベル 1：初級用 日本語の文章に合うように空欄に適切な語を入れなさい。

「地球の温暖化防止を目指す京都議定書の運用ルールが最終合意され、国際社会は議定書の 02 年発効に向けて動き始めた」

Having signed an accord that specifies rules (1: _____) the Kyoto Protocol, countries around the world (2: _____) prepare domestic arrangements that will allow them to (3: _____) the global warming agreement from 2002.

レベル 2：中級用 日本語の文章に合うように空欄に適切な語句を入れなさい。

「地球の温暖化防止を目指す京都議定書の運用ルールが最終合意され、国際社会は議定書の 02 年発効に向けて動き始めた」

Having signed an accord that (1: _____) the Kyoto Protocol, countries around the world have begun to prepare domestic arrangements that will allow them to (2: _____).

レベル 3：上級用 次の日本語の文章を英語に訳しなさい。

「地球の温暖化防止を目指す京都議定書の運用ルールが最終合意され、国際社会は議定書の 02 年発効に向けて動き始めた。日本も議定書の批准のため国内制度を整える必要がある。その国内制度の在り方を検討してきた環境省の中央環境審議会地球環境部会・小委員会は 14 日、基本的な考え方をまとめた」

2-4-3：Frequency

投書は、1 か月にひとつ書くペースが適切と思われる。教室では、各自にテーマを決めさせ、競争させる。英文和訳は、週 1 回の授業で 1 パラグラフ程度を扱うペースが適切であろう。

2-4-4：Feedback

投書

投書の英文に対しては、2 種類のフィードバックがある。まず、投書が実際に採用されると、編集者が添削したものが載せられる。これを送付時のオリジナルと比較して、どこがどう修正されているか、実際に赤ペンでオリジ

ナル文に書き込む。これをたくさんファイルして、自分の英文の難点を発見する。ただし、採用されなかった場合は、オリジナルを英語母語話者に添削してもらわなければならない。この方法は、添削者がいない環境では貴重であり、費用もかからない方法である。

もうひとつのフィードバックは、その掲載された投書を読んだ読者からの反応である。筆者自身も大学1年の時に、日本の英語教育に関して投書したことがある。図7は、投書する前にタイプで打った原稿の実物の写しである。当時(1984年12月)は電子メールがなかったので、書いた英文を編集長宛に封筒で送付しなればならなかった。図8は、実際に採用され添削された英文である。

採用されたら、編集された英文とオリジナルの原稿をさっそく比較するのを忘れてはならない。この投書の第1パラグラフを例にとると、以下修正された箇所があることがわかる。

- | オリジナル | 採用文 |
|----------------------|-------------------------|
| 1) Then naturally | ⇒ Naturally |
| 2) language barriers | ⇒ the language barriers |

このように、文の接続や冠詞の使い方などを、実例を通して学ぶことができる。送付したものは必ず保存しておき、実際に編集されて出たものと比較して自分で赤ペンを入れて添削しておけば、学習の手助けになり、かつ費用はほとんどかからない。何より、自分への励みになり自信もつく。

なによりもうれしいのが、こうして書いたものに読者からの好意的なフィードバックがあることだ。図9は、筆者が書いた2つ目の投書文であるが、双方に後日反応の投書があった。(図10) このように、ライティングは時間の経緯があるもの、いまインターネット上で盛んなチャットのように、インターラクティブな要素を含むコミュニケーションに発展することがある。

初めて投書し、それが採用されたので、当時は感極まった記憶がある。筆

者はこの頃、英文を書くことの楽しさを実感した。英語学習のモチベーションが高まり、自分の考えをまとめ英文にする訓練が発話力へ転移し、口頭での自己表現力の強化になったと、自らの体験から断言できる。

和文記事の英訳

和文英訳の場合は、目標とする英文が入手されているので、それを参考に書いた英文を自分で添削することができる。特に、冠詞の使い方や名詞の単複の判断などは、実例を通して具体例が学べるので、大いに参考になる。

また、単に形態素レベルにとどまらず、構文やパラグラフのレベルでも英文の構成について多くのことが学べる。例えば、図5のデータの場合、よく見ると日本語のリードの部分は、英文では第2パラグラフの英文の関係節の中に埋め込まれている。この方がむしろ英文として適切であると判断したのだろう。英訳した後にこのような発見を何度と体験するうちに、パラグラフ単位の英作文のセンスが磨かれていくものと考えられる。

FIGURE 7 筆者が学生時代に書いて初めて採用された投書のオリジナル

Today the economic prosperity of Japan depends mainly on foreign trade, and our lives are firmly concerned with international situation. Then naturally we are forced to get over language barriers to accord with the community of nations from an international point of view.

On behalf of students who have been studying English for six years and half, I want to emphasize the importance of English as a tool of communication with different cultures.

In terms of the actual conditions of English education in schools, I observe they don't meet the expectations of our society. It cannot be denied that most English language teachers fail to pay enough attention to the practical aspects of English. I guess that there are two main reasons for that failure. One is the fact that English as a subject, no doubt, has degenerated into a mere means to an end of passing exams, and teachers give priority to the grammatical aspects of English for students to get high marks on paper tests. Therefore, however hard you may assert to an examinee that he must learn practical English, he cannot afford to spare the time for it. Another reason is that the majority of English teachers seem not to be able to speak English well enough to instruct students. A computer teacher can use computers, and an English teacher should be able to use English practically.

Teachers should participate and be given the opportunities to share real international experiences and make their students recognize how interesting and wonderful it is to master practical English. And the English language programs in schools should be more flexible, and more emphasis should be put on the capacities of students to express themselves well even if they make grammatical mistakes.

By all means drastic innovations should be made, and we should begin with enhancing the ability of English language teachers to speak English enough to attract students.

FIGURE 8 筆者が学生時代に書いて採用された初の投書

printed on The Daily Yomiuri, Saturday, December 22, 1984

Letters To The Editor

Teachers' English Proficiency Poor

Sir:

Today the economic prosperity of Japan depends mainly on foreign trade and our lives are firmly concerned with the international situation. Naturally we are forced to overcome the language barrier to accord with the community of nations from an international point of view.

On behalf of students who have been studying English for 6½ years, I want to emphasize the importance of English as a tool of communication with different cultures.

English education in schools don't meet the expectations of our society. Most English language teachers fail to pay enough attention to the practical aspects of English.

I guess there are two main reasons for this failure. One is that English as a subject has no doubt degenerated into a mere means of passing exams and teachers give priority to the grammatical aspects of English for students to get high marks in paper

tests. Therefore, however strongly an examinee is told he must learn practical English, he cannot afford to spare the time for it. Another reason is that the majority of English teachers appear unable to speak English well enough to instruct students. A computer teacher can use computers and an English teacher should be able to use practical English.

Teachers should participate and be given an opportunity to share real international experiences and make their students recognize how interesting and wonderful it is to master practical English. And the English language programs in schools should be more flexible, and more emphasis should be put on the capacities of students to express themselves well even if they make grammatical mistakes.

By all means drastic innovations should be made and we should begin with enhancing the ability of English language teachers to speak English proficient enough to attract students.

Toshihiko Kobayashi
Otaru,
Hokkaido

FIGURE 9 筆者が学生時代に書いた2つ目の投書

printed on The Daily Yomiuri, Monday, January 7, 1985

Letters To The Editor

Buddhist Outlook Of World Needed

Sir:

One day I asked my students, "What happened in India on Dec. 8 a long, long time ago?" Nobody could answer. I asked another question, "What happened on the same day about 45 years ago?" This time a few students replied, "The Pacific War broke out."

The Pacific War is one of the most tragic events in world history. To the Japanese people it is unforgettable. Not only Japan, but every nation, should not put into oblivion what happened in India some 2,500 years ago.

At the break of dawn on Dec. 8, Gautama, who had been meditating under the bodhi tree for seven days and nights on end, took a look at Lucifer and suddenly got enlightened to become Buddha. Based on sunyata, Gautama preached to his followers to see things as they are.

Together with other major world religions, the spirit of Gautama's teaching has so far set lots of people free from the chains of sins and errors. Now in this country, books on Buddhism are published one after another. People read them to get some clues to salvation in this world and happiness in the hereafter.

Born in India, Buddhism came through China and Korea to Japan, where it flourished. Aside from the exact date of Gautama's enlightenment, everybody should know, either as part of his culture or his religious belief, about how the great teacher of mankind sought after Nirvana and what he taught—Dharma and Karma. I firmly believe that the Buddhist outlook of the world has nev-

er been needed more than now.

Takamasa Arai
Tomioka,
Gumma-ken

* * *

Learning English Not Bad Burden

Sir:

When we look at the present situation in various fields in the world, we realize how convenient it is to have a good command of English. Yet for us Japanese, English is not our mother tongue so we face a language barrier that cannot be overcome easily.

I sometimes think that if Japanese were the common language of the world and other people had to learn it, we would feel superior. I wonder how native speakers of English regard their language power?

I also think every so often that while nonspeakers are making an effort to master English, those who speak English as their native language can afford to do something else to further their knowledge.

In this respect, it seems that we are handicapped in the use of time. I used to think how serious and unfair this problem was, but now I no longer think so.

I've found it possible to come across unexpected wonderful things while learning English. We can get a great deal of knowledge and widen our horizons.

In this way, we are happy to bear the burden of developing our English knowledge. Anyhow, we should continue to do our best to master English in order to fit in the community of nations.

Toshihiko Kobayashi
Otaru,
Hokkaido

FIGURE 10 筆者が学生時代に書いて採用された2つの投書に対する反応

printed on The Daily Yomiuri, Thursday, January 17, 1985

Letters To The Editor

Practical Skills Should Be Raised

Sir:

Mr. Kobayashi's "Teachers' English Proficiency Poor" (Page 3, Dec. 22 issue) gave food for reflection.

I quite agree with Mr. Kobayashi that English education here is grammar-centered for the sole purpose of students passing the entrance exams and that teachers of English are poor at the global language of today.

Since English is taught as one of the most useful means of communication, teachers should be proficient in speaking it. For teachers to be able to speak English better, the Education Ministry should send more teachers where it is spoken as part of its English education program.

Totally immersed in English, teachers are sure to be fluent speakers of that language, so that, unlike what is done at middle and high schools today, little Japanese will be employed in English classes.

Here in Gumma-ken, several native speakers are teaching English at the invitation of the prefectural government, and groups of high school teachers meet regularly to discuss various problems in English under the good guidance of the guest instructors.

This kind of positive attitude should be encouraged. At the same time, teachers have to make every effort to improve their practical English by making most of audiovisual aids such as cassette tapes, TV and movies.

Last but not least, steps should be taken to examine college entrance examinees in hearing and speaking English, so that due attention will be paid to the practical as-

pects of English. And one thing we should not forget is that learning English leads to the better understanding of our mother tongue—Japanese.

Takamasa Arai
Tomioka,
Gumma-ken

English Learners Worth Admiration

Sir:

In response to Mr. Kobayashi's letter printed in the January 7 issue of The Daily Yomiuri (Page 3), I wish to say I greatly admire him for his diligence in wishing to master English.

As a native speaker of English living in Japan, I can now understand how difficult English must be. Even after residing here for many years, I find the Japanese language a real challenge—not to master, just to understand and be understood.

I applaud anyone who earnestly pursues the mastery of a language other than their mother tongue. In the case of English vs. Japanese, because they are so vastly different, it takes an extra amount of effort to be able to make some progress.

As for others whose native language is English, I do not know their feelings. As for myself, I do not feel superior to those who do not know English and cannot speak it. After grappling with the Japanese language for these years, I can only admire anyone who seeks to learn English.

My experiences in your country, Mr. Kobayashi, have been only positive ones. The Japanese people I've known have been kind and helpful, and I want to express my appreciation. Thank you.

Lois Taylor
Saitama-ken

3. CONCLUSION

本稿で紹介した指導法は、筆者自身が日々大学の授業で実践している実例であり、改良、改善の余地があるものである。1990年代にインターネットが我々の生活に普及し始め、いまは教育の世界でもその存在を無視することができなくなった。言語教育にインターネットを活用することは、効率的であるばかりではなく、ネット社会における情報の取得と選抜、保存、そして発信というプロセスの中に我々が教える大学生が既に収まっている現実の中では、彼らの英語の使用域が、従来の英語を使用した他言語話者との直接対話よりもむしろネットを通じた意思疎通の機会の方が多くなってきた現実に沿うものである。

ネット時代の到来により、実用英語の教育の視点は、英会話を中心とした話し言葉に限定されるのではなく、書き言葉へと拡張した。リーディングとライティングの技能への再評価が始まったと言える。ネット上の文書を素早く読み、英文のメールを即座に打てる能力が、実用英語の中心に据えられてきたと言っても過言ではない。

時事英語は、この英語が共通語のインターネットの世界で流れる情報そのものであり、この情報の正しい扱い方、効率よい扱い方を教えることは時代の要請であり、それは英語教員に期待される新分野である。英語をコミュニケーションの道具として位置付け、その技能があるがゆえに得られる恩恵の実例を、教室内でタスクを通じて示すことは、学習者の英語学習へのモチベーションを高める手法としてこの上ない効果があるものと考えられる。

時事英語は、現在の大学生が卒業して社会で接する英語そのものである。教員はこの事実を無視してならない。外国語教育の中心課題は、目標言語であらゆるメディアで情報処理を行う能力を養成することであることを認識し、情報価値の高いメディア英語を新鮮なうちに活用し、専門の授業に負けない最新の世界情勢を伝える気構えが、大学の英語教官・教員に求められているのではないだろうか。

REFERENCES

- Briton, D, M. Show & M. Wesche. (1989). *Content-Based Second Language Instruction*. New York: Newbury House Publishers.
- Elliot, A. J. (1981). *Child Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fujii, A. & K. Kato. (1997). *English for Mass Communication*. Tokyo: Asahi Press.
- Flesch, R. (1979). *How to Write Plain English: A Book for Lawyers and Consumers*. New York: Harper & Row.
- 船山仲他 (1996). 「時事英語の理解について: 認知ファイルの観点から」 『時事英語学研究第 35 号』 pp.15-37.
- 本名信行 (1993). 『文化を超えた伝え会い』 東京: 開成出版
- Itoh, K. (1986). *This is Plain English*. Tokyo: Nihon Honyakuka Yosei Gakko.
- Kizuka, H. (1996). *An Introduction to Newspaper English*. Tokyo: Hokuseido.
- Kobayashi, T. (1996). Response to Japanese college EFL learners' difficulties in SLA. *Hokkai Gakuen Jimbun Ronshu, No. 7*, 119-195.
- Kobayashi, T. (1997). 「中学・高校の文法で時事英語は大丈夫」 『English Stream 第 2 号』 pp.8-19. Tokyo: Apollo Press.
- Kobayashi, T. (1998). Authenticity of translated texts in English. *Otaru University of Commerce, The Review of Liberal Arts, No.98*, 47-92.
- Kobayashi, T. (1999). Teaching English through movies with closed caption system. *Otaru University of Commerce, Language Studies, No. 7*, 21-40.
- Larsen-Freeman, D. (1986). *Techniques and Principles in Language Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Marshall, N. & T. Miyabe. (1995). Content-based listening through mass media. 『時事英語学研究第 34 号』 pp.133-143.

- Miyano, T. & J. Ruelius. (1999). *Welcome to USA Today*. Tokyo: Kaibunsha Shuppan.
- Nunn, R. (1999). Teaching a critical reading of international media. *JACET Bulletin No. 30*, 59-68.
- 小川芳男編 (1982). 『英語教授法辞典』東京:三省堂
- 小野田榮 (2000). 「メディア英語教育におけるプロダクティブな活動の取り組み: グループプロジェクトの導入」 『時事英語学研究第39号』 pp.87-102.
- Ota, K & T. Otsu. (2002). *Reading Time*. Tokyo: Eichosha.
- Porter, D & J. Roberts. (1981). Authentic listening activities, In M. Long & J. Richards (Eds), *Methodology in TESOL: A Book of Readings*, 177-187. New York: Newbury House Publishers.
- Richards, J., J. Platt & H. Platt. (1985). 『ロングマン応用言語学用語辞典』東京:南雲堂
- Richards, J. (1987). Listening comprehension: approach, design, procedure. In M. Long & J. Richards (Eds), *Methodology in TESOL: A Book of Readings*, 161-176. New York: Newbury House Publishers.
- Richards, J., J. Platt & H. Platt. (1992). *Longman Dictionary of Language Teaching & Applied Linguistics*. Essex: Longman Group UK Limited.
- Shiokawa, H. (1997). Teaching current English through critical writing. 『時事英語学研究第36号』 pp.74-87.
- Ur, P. (1984). *Teaching Listening Comprehension*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Yamane, S. & K. Yamane. (1996). *T.V. News from the U.S.A. (5)*. Tokyo: Kinseido.
- Yasuda, T. & T. Fukuda. (1997). *Newspaper English*. Tokyo: Asahi Press.
- 吉田国子、渡辺敦子、山戸衣絵 (1996). 「英字新聞の効果的活用法: 教材作成の理論と実践」 『時事英語学研究第35号』 pp.109-128.

DATA

TOEFL Practice Tests Workbook Volume 2. (1997). Princeton: Educational Testing Service.

小樽商科大学教授要目 昭和 59 年度

小樽商科大学シラバス (授業計画) 平成 13 年度

WEB SITES

www.mainichi.co.jp

www.yomiuri.co.jp

www.japantimes.co.jp

www.time.com

www.voanews.com

APPENDIX I

Richards(1987:167-169)が示すリスニング技能の構成要素

Micro-Skills: Conversational Listening

1. Ability to retain chunks of language of different lengths for short periods
2. Ability to discriminate among the distinctive sounds of the target language
3. Ability to recognize the stress patterns of words
4. Ability to recognize the rhythmic structure of English
5. Ability to recognize the functions of stress and intonation to signal the information structure of utterances
6. Ability to identify words in stressed and unstressed positions
7. Ability to recognize reduced forms of words
8. Ability to distinguish words boundaries
9. Ability to recognize typical word order patterns in the target language
10. Ability to recognize vocabulary used in core conversational topics
11. Ability to detect key words (i.e., those which identify topics and propositions)
12. Ability to guess the meanings of words from the contexts in which they occur
13. Ability to recognize grammatical word classes (parts of speech)
14. Ability to recognize major syntactic patterns and devices
15. Ability to recognize cohesive devices in spoken discourse
16. Ability to recognize elliptical forms of grammatical units and sentences
17. Ability to detect sentence constituents
18. Ability to distinguish between major and minor constituents
19. Ability to detect meanings expressed in differing grammatical forms/sentence types (i.e., that a particular meaning may be expressed in different ways)
20. Ability to recognize the communicative functions of utterances, according to situations, participants, goals
21. Ability to reconstruct or infer situations, goals, participants, goals
22. Ability to use real world knowledge and experience to work out purposes, goals, settings, procedures
23. Ability to predict outcomes from events described
24. Ability to infer links and connections between events
25. Ability to deduce causes and effects from events
26. Ability to distinguish between literal and implied meanings
27. Ability to identify and reconstruct topics and coherent structure from ongoing discourse involving two or more speakers
28. Ability to recognize markers of coherence in discourse, and to detect such relations, as main idea, supporting idea, given information, new information, generalization, exemplification
29. Ability to process speech at different rates
30. Ability to process speech containing pauses, errors, corrections
31. Ability to make use of facial, paralinguistic, and other clues to work out meanings
32. Ability to adjust listening strategies to different kinds of listener purposes or goals
33. Ability to signal comprehension or lack of comprehension, verbally and non-verbally

APPENDIX II

Richards(1987:167-169)が示すリスニング技能の構成要素

Micro-Skills: Academic Listening (Listening to Lectures)

1. Ability to identify purpose and scope of lecture
2. Ability to identify topic of lecture and follow topic development
3. Ability to identify relationships among units within discourse (e.g., major ideas, generalizations, hypotheses, supporting ideas, examples)
4. Ability to identify role of discourse markers in signaling structure of a lecture (e.g., conjunctions, adverbs, gambits, routines)
5. Ability to infer relationships (e.g., cause, effect, conclusion)
6. Ability to recognize key lexical items related to subject/topic
7. Ability to deduce meanings of words from context
8. Ability to recognize markers of cohesion
9. Ability to recognize function of intonation to signal information structure (e.g., pitch, volume, pace, key)
10. Ability to detect attitude of speaker toward subject matter
11. Ability to follow different modes of lecturing: spoken, audio, audio-visual
12. Ability to follow lecture despite differences in accent and speed
13. Familiarity with different styles of lecturing: formal, conversational, read, unplanned
14. Familiarity with different registers: written versus colloquial
15. Ability to recognize irrelevant matter: jokes, digressions, meanderings
16. Ability to recognize functions of non-verbal cues as markers of emphasis and attitude
17. Knowledge of classroom conventions (e.g., turn taking, clarification requests)
18. Ability to recognize instructional/learner tasks (e.g., warnings, suggestions, recommendations, advice, instructions)